九州の甕棺

——弥生時代甕棺墓の分布とその変遷——

藤　尾　慎一郎

Ⅰ　甕棺研究の意義　　Ⅲ　分　布
Ⅱ　地名表および分布図作成の手続き　　Ⅳ　小　結

Ⅰ　甕棺研究の意義

本稿で扱う甕棺とは，埋葬専用棺として特殊に発達した超大形の甕形土器で，弥生時代の北部九州を中心とする地域に分布するものをさす。甕棺には実年代を推定しうる青銅器などの舶載品が多量に副葬されているため，甕棺自身を利用した土器編年と舶載品から導き出される絶対年代との対応を目的とした研究が古くから行われてきた［岡崎，1977］。また，高倉洋彰の業績に代表されるような，甕棺墓の墓地構成から北部九州における弥生時代社会の発展過程を解明していく研究も盛んである［高倉，1972］。最近では，墓地における甕棺墓の配列に注目して親族組織の復原を試みた春成秀爾［春成，1984］や田中良之等の研究もある［土肥・田中，1988］。

このように，甕棺および甕棺墓を材料とする研究の有効性は，きわめて大きいものがある。ところが，甕棺の分布や甕棺墓の規模などといった基礎的なデータは，今なお提示されていない。基礎的なデータの整理を効率よく進めるには，時間軸と空間設定の整備が必要不可欠である，そこで甕棺の編年や地域色研究に関する最近の研究動向を少しばかり検討しておこう。

1　編年研究

森貞次郎が設定した伯玄社式から曰佐原式に至る9型式編年は［森，1968］，現在でも基本枠としての位置を失っていない。基本的には森編年を細分する方向で継承・発展させたものといえよう。橋口達也の研究はその代表例である［橋口，1979］。橋口は

甕棺の形態に注目した型式分類を行うとともに，甕棺の蓋として使用された壺や鉢などを利用して甕棺編年と日常土器編年との対応を計った。さらに甕棺と副葬品との関係を論じて相対年代に絶対年代を付与する作業を行った。この総括的研究をへて，福岡県内では橋口編年との対応を念頭においた編年が，甘木市栗山遺跡[佐々木，1982]や筑後市権現塚北遺跡［橋口，1985］において実践されつつある。また，速水信也は小郡市横隈狐塚遺跡を対象に，中期後半から後期前半の時期内において一型式内の細分を実践している[速水，1985]。

以上のように細分作業が進展してくると，福岡・春日地域に分布する甕棺に比べると一回り小さくて丸みをおびた器形をもつ埋葬専用棺の存在が知られるようになり，しかもこれらは系譜を異にする甕棺との考えが出てくるようになってきた。橋口の「小形棺」［橋口，1979］，速水の「中形棺」［速水，1985］がこれに相当する。この甕棺は一つの地域に限定的な分布を示すというよりも，地域をこえたかなり広範囲にわたる分布を示すことや，分布の中心が福岡・春日地域の周辺にあることから，周辺部の甕棺を理解するうえで注意しておく必要がある。今後は甕棺を構成する複数の系列を考慮したうえで細分作業を行っていく必要がある。

2　地域色研究

地域色は編年研究が深まっていくにつれて常にかかわってくる問題で，特に甕棺の場合は製作に携わった専門工人の問題[(1)]が背景に存在するため，地域色が顕在化しやすい。

型式学的な方法でこの問題にはじめて取り組んだのは井上裕弘である。井上は，甕棺の胎土に含まれる砂粒の量と粒度に注目し，砂粒の多寡，精粗から胎土を二大別している。そのうえで，焼成法の差に起因する甕棺器表面の色調を，器表上の刷毛目痕の幅 1 cm あたりの本数，および刷毛目痕断面にみられる凹面と凸面の幅との関係から 6 細分した調整パターンとの相関をはかり，色調と調整パターンの組合せから立岩式併行期の甕棺を 4 分類した。そしてこの胎土，色調，調整法の組合せが地域毎に特徴をもつことに着目し，立岩式併行期の旧筑前に相当する福岡・春日，粕屋，甘木・朝倉，二日市の五つの地域で，地域型甕棺の存在を認め福岡・春日地域の一の谷型と原型，粕屋地域の粕屋型，甘木・朝倉地域の栗山型，二日市地域の道場山型の計 5 つの地域型を設定したのである[井上，1978]。

その後，先の指標にタタキ技法の分類や調整順序と最終調整種のパターンなどの技術的指標と，胴部の膨らみや底部付近のしまりぐあいにみられる器形などの形態的指

標を加えてあらたに嘉穂の立岩型，早良の藤崎型を設定し，計七つの地域型が存在するとし自説を発展させている[井上，1985]。また橋口も，主に原体の大きさを異にするタタキ技法の種類や，タタキのち刷毛のちナデといった器面調整の順序に違いがあることに着目し，器形的特徴を考慮したうえで，前期から中期後半にいたる，福岡・春日，甘木・朝倉，嘉穂に分布する甕棺の特徴について検討している[橋口，1982]。

両氏の研究は，文様を基本的に施さない北部九州の土器を対象にした地域色研究を行う場合の方向性を示したもので，今後日常土器を対象にして地域色研究を進めていくうえで指針となる研究である。ただ日常土器の場合は専門工人の存在が確実な甕棺と比べて，一般に指摘されている形態的・技術的地域差の意味するものが異なる可能性を充分に考慮しておく必要がある。

井上・橋口以後，各地で地域型甕棺の設定を目的とした研究が活発に進められている。佐賀では，七田忠昭が神埼郡二塚山遺跡出土甕棺の詳細な形式分類を行ったが，地域型甕棺の設定までは至っていない[七田，1979]。唐津の甕棺については，橋口が埋葬法の差を指摘[2][橋口，1982]している他，中島直幸が器形を指標にして佐賀との比較を試みているものの，明確な形で地域型甕棺の設定は行っていない[中島，1983]。中島は「まだ各地域毎の特性や地域性を十分把握していないので各土器形式の区分及び細分はいたずらに分けすぎないようにするべきであろう。」[中島，1983:42]とし，時期差と地域差の混同を避ける姿勢が必要であると述べている。

福岡県南部では，橋口が筑後市権現塚北遺跡の編年を行った際に，この地域の器形的特徴を明らかにして，全体的に甘木・朝倉との共通性が高い点を指摘している［橋口，1985]。平島勇夫は福岡県大牟田市羽山台遺跡の甕棺について，橋口編年[橋口，1979］との対応を計った。その際丸みを帯びた別系統の甕棺の存在，いわゆる橋口の小型棺が存在することには言及しているが，地域型甕棺の設定までは行っていない[平島，1982]。

熊本県地域では中期の甕棺を対象にした西健一郎の研究がある[西，1982]。西は福岡系[3]の大形棺と小形棺が時期を追って南へ伝播していく過程を追跡しながら，県内で成立していく地域型甕棺を捉えようとした。その結果城ノ越式併行期の金海式系甕棺や立岩式併行期の須玖式系甕棺を抽出することに成功している。西の研究は甕棺墓中心地帯からの伝播と，それを受けて成立する地域型甕棺の関係をよく示したものとして注目される。

以上のような佐賀，唐津，南筑後，熊本を対象にした研究では，器形に重点をおいた地域色の指摘にとどまる傾向がある。今後は製作技術にまでふみこんだ研究を進め

る必要がある。橋口は，福岡・春日地域の周辺部に位置する嘉穂や甘木・朝倉における甕棺製作のあり方について，「甕棺への憧憬と大形棺製作への努力」と評したが［橋口，1982:477］，「単に須玖式文化圏縁辺部の出来事として片づけるのではなく，福岡と熊本における弥生文化を生みだした，弥生社会の構造上の問題として違いを明らかにする」［西，1982:465］という各地の独自性を重視する立場から考えていくこともまた必要であろう。

専門工人の存在を背景とした甕棺の地域色研究は，北部九州各地における弥生社会を考えるうえで，もっとも有効なテーマの一つである。従来，甕棺の分布範囲は弥生時代における北部九州の範囲と重複してイメージされてきた。その範囲は東限を嘉穂，北限を粕屋，西限を唐津，南限を熊本県宇土半島とするものである。しかしこれは甕棺が存続する全期間を通してみた最大範囲を示している。すなわち時間の経過とともに拡大・縮小する分布圏の動態についてはさほど注目されることもなく，また各時期毎の出土基数を示した地名表なり分布図も提示されていない。甕棺の地域色研究が従来のように立岩式併行期だけにとどまるわけはなく，先のような基礎的データを盛り込んだ地名表や分布図の提示が早急に必要な段階にきている。本稿の目的はまさにここにあり，今後の基礎作業として位置づけられる。

Ⅱ　地名表および分布図作成の手続き

甕棺が研究の対象となってから多くの甕棺遺跡が調査・報告されている。しかし報告の形態は報告者毎に異なっているため，それらを一つのかたちにして地名表や分布図にまとめるには，かなり大幅な整理を必要とする。本章では地名表にかかげる各項目について一定のルールづくりを行う。

1　時　間　軸

今回の地名表では原則として相対区分を採用しない。これは研究者があまりにも不用意に用語を使用しているからで，統一はまず不可能と考えられるからである。たとえば，前・中・後期の三期区分[(4)]には異論がないとしても，各期内の細分となると単に各期を構成する型式の数にあわせて単純に振り分けているのが実状である[(5)]。一つの時期を二分するなら前半と後半，三分するなら前葉・中葉・後葉が基本となるが，現実には三区分に初頭・末を加えて五区分する場合が多い。また前半・後半のように二分する区分法では「中頃」が表現できないことから，前半・中頃・後半といった奇妙な

相対区分も存在する。したがって地名表ではこのような事態を避けることが肝要である。

そこで原則として森が設定した型式を軸とした時期区分を採用する。表1は本稿の時期区分と現在まで発表されてきた代表的な編年案との対照表である。[6]

2　甕棺の定義

甕棺をどう認識するかで対象とする時間幅にも関係してくる。本稿では甕棺墓として墓地構成も含めて広義に捉える立場をとる。甕棺墓の終焉はほぼ弥生時代の終わりと同じくするが，問題となるのは初現をどこに求めるかである。一般的には前期後半の伯玄社式もしくは前期末の金海式に求められているが，本稿では早期の刻目突帯文土器の成立をもって，甕棺墓の開始と考える。根拠は，刻目突帯文土器の成立を境に棺として使用される土器や墓地構成が大きく変化するからである。刻目突帯文土器成立以前は，日常土器から転用された粗製土器（深鉢）を棺として使用し，1基ないしは数基の墓地構成で多数群集せず，周辺に同時期の住居跡や土壙を1基ないし数基伴うといった生活域との未分離状態を特徴としている。しかし刻目突帯文土器成立以降は，新しく出現した埋葬専用の長胴壺を棺として主に使用し他の器種と組み合わせた複式棺も登場する。[7] また支石墓の内部主体として営まれたり，支石墓に隣接して営まれて群集した墓地構成をとり，生活域とも分離されていることなど縄文的な埋葬形態からは脱却しているからである[森田，1984]。長胴壺自身も甕棺の祖型であり，型式学的な変遷をたどることができる点も重要な根拠の一つである。以上のように土器を含めて弥生的な埋葬形態が成立した時点をもって甕棺墓の開始と考えるのである。もちろん本格的な甕棺墓が伯玄社式からであることは言うまでもないことである。

そこで森編年では型式が未設定の伯玄社式以前については，刻目突帯文土器単純段階を「刻目突帯文土器」，夜臼・板付Ⅰ式土器共伴期を「板付Ⅰ式土器」として設定することにする。[8]

3　各型式の問題

森が設定した型式をめぐってはいくつかの議論がなされている。金海式という名称に対する新町式［橋口，1987］，桜馬場式に対する一の谷式［高倉，1978］，曰佐原式に対する西新式がその代表である。ここでは様式として存在するかという点で争われている城ノ越式の問題についてふれておく。

折尾学は，城ノ越式の大形棺が型式学的には設定できるとしながらも，佐賀県宇木

表1　甕棺編年対照表

本稿		森 68	速水85	佐々木82	橋口79	七田79	高倉78	高島77	折尾71
Ⅰ	刻目突帯文								
	板付Ⅰ							Ⅰ	
	伯玄社	伯玄社			KⅠa			Ⅱ	金隈Ⅰa
					KⅠb		金隈		
Ⅱ	金海	金海			KⅠc			Ⅲ	Ⅰb
	城ノ越	城ノ越		栗山Ⅰ	KⅡa		汲田	Ⅳ	Ⅱa
	汲田			Ⅱ	KⅡb			Ⅴ	
		汲田		Ⅲ	KⅡc	二塚山Ⅰ			Ⅱb
Ⅲ	須玖	須玖		Ⅳ	KⅢa	Ⅱ	須玖	Ⅵ	Ⅲa
			横隈狐塚Ⅰ						Ⅲb
									Ⅲc
	立岩(古)	立岩	Ⅱ	Ⅴ	KⅢb	Ⅲ	立岩	Ⅶ	Ⅳ
			Ⅲ						
Ⅳ	立岩(新)		Ⅳ	Ⅵ	KⅢc				
			Ⅴ						
	桜馬場	桜馬場	Ⅵ	Ⅶ	KⅣa	Ⅳ	桜馬場	Ⅷ	Ⅴ
			Ⅶ						
			Ⅷ		KⅣb	Ⅴ			
	三津	三津	Ⅸ		KⅣc			Ⅸ	
Ⅴ	曰佐原				KⅤa				
					KⅤb				
		曰佐原			KⅤc			Ⅹ	
					KⅤd				
					KⅤe				
					KⅤf				

汲田遺跡や福岡市金隈遺跡における墓地構成はこの段階に関する限り小形甕棺に限られていて，大形甕棺が存在しないことを根拠に大形甕棺の編年からは除かれるべきであるとした［折尾，1971］。橋口はこれに対して城ノ越式の少なさは事実として認めながらも，それはこの段階が甕棺葬の発展期に相当していて土壙墓や木棺墓とともに墓地を構成しているからだとし，城ノ越式大形甕棺の存在を強調している［橋口，1979］。これと似たような問題は三津永田式についても指摘されているが［高倉，1978］，甕棺墓の成立・発展・衰退を考える上で重要と考えられるため甕棺の型式として設定する。

城ノ越式大形甕棺が様式として存在することは，周辺部への甕棺墓の伝播とも関連がある。

筑後南部や熊本，嘉穂などの周辺地域に福岡系の大形甕棺が登場するのはこの段階からで，しかも橋口が指摘している「地方色ある甕棺」がこの伝播に重要な役割を果たしていることもあって，城ノ越式大形甕棺を設定することは有効であると考える。

この結果，本地名表の型式区分は二分した立岩式を含めた森編年の10区分に刻目突帯文土器，板付Ⅰ式を加えた12区分となる。

4　甕棺編年の大別

今回，集成した約400遺跡のうち型式毎の基数が明確な遺跡はかなり少ないため，型式毎の分布図につかえる遺跡がかなり限定されてしまうことになり，型式毎に分布圏の消長を知るにははなはだ不利となり意味も半減してしまう。したがって先の12区分を整理・統合して大別し，できるだけ多くの遺跡を有効に利用する必要がある。たとえば，「汲田式から立岩式にかけて50基出土」という表現で報告してある遺跡がかなりの数にのぼるからである。

大別するための指標としては次の四つがある。

（1）甕棺の製作技法などの技術的側面

各段階毎に技術が向上している。刻目突帯文段階は埋葬専用棺（長胴壺）が成立し，壺の製作技法でつくられる。器面調整は壺に一般的な研磨調整を施す。城ノ越式段階になると刷毛目のあとナデて仕上げるといった甕棺独自の調整技法が成立するとともに，焼成法の変化に伴う軟質から硬質化への硬度の変化や，黄褐色から赤褐色・黄褐色への色調の変化がみられる。

須玖式段階では，さらなる製作技術の向上を背景とした，焼成法の進歩にもとづく色調の変化がみられ，淡黄色・黄白色化する。

（2）大形棺・中形棺にみられる系列的な差

大形棺と呼ばれる甕棺は刻目突帯文土器の成立と同時に出現して，少しづつ大形化の方向へ進む。この大形化は伯玄社式の段階で日常用の大形壺とは法量的に隔絶化する。城ノ越式段階で器高は80cmを超え，須玖式段階になると100cmを超えるものも出現する。しかし橋口編年のKⅢcに相当する立岩新段階から一転して器高が低くなりはじめ，福岡・春日地域では大形棺自体が衰退。その他の地域でも三津永田式段階でほぼ消滅する。

一方，橋口の「小形棺」，速水の「中形棺」と呼ばれる埋葬専用棺が橋口編年のKⅡb式段階に成立し，立岩式古段階まで大形棺と並行して製作され用いられる。やがて新段階になると器高の増大へと転じ，器高が低くなって棺として衰退していく大形棺に取って替わるように盛行する。

（3）大形棺の周辺地域への波及と衰退

筑前・佐賀に限定されていた大形棺も城ノ越式段階になると南筑後・熊本（菊池川流域）で成立する。立岩式段階になると，須玖式段階に大形棺がもたらされていた嘉穂において在地の大形棺が成立する。しかし桜馬場式段階になって，福岡・春日で甕

棺葬が衰退しはじめ他の墓制へと転換していくのを皮切りに三津永田式段階には佐賀でも同じ状況がみられる。そして曰佐原式段階には，北部九州的甕棺葬がすでに終焉しており，一部の地域で残存しているほかは糸島地域で特殊に展開している程度となる。

（4） 甕棺に副葬される副葬品の種類と所有形態の変化

小田富士雄の研究によれば次のように大別される[小田，1987]。

第Ⅰ期（金海式～汲田式） **分散所有型** 複数の集団から構成される共同墓地内で，有力集団の家長，さらには家族が漢以前の朝鮮製青銅器を一棺一品的に所有する。

第Ⅱ期（須玖式，立岩式） Ⅰ期の副葬品に加えて前漢・九州産青銅器，鉄製武器を所有する。墳墓形態には地域型が幾つか存在する。

第Ⅲ期（桜馬場式，三津永田式） **集中所有型** 王莽・後漢前半代の鏡，九州産青銅器を所有する。

表2 甕棺の時期大別の指標

	本稿編年	橋口編年	製作技法	系列 大形棺	系列 中形棺	分布	副葬品
Ⅰ	刻目突帯文 板付Ⅰ 伯玄社	KⅠa KⅠb	壺の製作技法			唐津・早良・佐賀・神埼 福岡・春日へ	
Ⅱ	金海 城ノ越 汲田	KⅠc KⅡa KⅡb KⅡc	甕棺独自の製作技法の成立 器高80cm			南筑後・熊本 大村	分散所有型 漢以前の朝鮮青銅器
Ⅲ	須玖 立岩古	KⅢa KⅢb	焼成法の進歩 調整パターンの確立 器高1m			嘉穂	朝鮮・前漢・九州産青銅器 鉄器
Ⅳ	立岩新 桜馬場 三津永田	KⅢc KⅣa KⅣb KⅣc				熊本で衰退 福岡で衰退 佐賀で衰退	集中所有型 王莽・後漢・九州産青銅器
Ⅴ	曰佐原	KⅤa KⅤb KⅤc KⅤd KⅤe KⅤf				残存甕棺墓 日田 糸島で特殊に展開	

以上，（1）～（4）で示した特徴を指標に本地名表では次のように大別する。

Ⅰ期（刻目突帯文～伯玄社式）　甕棺墓の萌芽期に相当する。土器としては大形に属するがまだ日常土器とは法量的に隔絶されてはいない。形態的に壺形を呈している。

Ⅱ期（金海式～汲田式）　甕棺墓の発展期に相当する。法量的に日常土器から隔絶した超大形に達し（器高80cm以上），形態的にも甕形になって甕棺という名にふさわしい形態になる。甕棺独自の製作技法も確立し，南筑後・熊本（菊池川流域）でも在地の大形棺を作りはじめる。副葬品の所有形態は小田の第Ⅰ期である。

Ⅲ期（須玖式，立岩式古段階＝橋口KⅢb）　甕棺墓の最盛期に相当する。さらに大形化して器高が100cmを超えるものも出現する。甕棺としてはあらゆる面でもっとも発達し，頂点に達した段階である。嘉穂で在地の大形棺を作りはじめる。副葬品の所有形態は小田の第Ⅱ期である。

Ⅳ期（立岩式新段階＝橋口KⅢc～三津永田式）　甕棺墓の衰退期に相当する。大形棺の小形化と衰退，中形棺の大形化に代表される。福岡・春日，佐賀では甕棺墓自体が衰退し，他の墓制への転換が進む。副葬品の所有形態は小田の第Ⅲ期である。

Ⅴ期（曰佐原式）　甕棺墓の残存期に相当する。Ⅳ期までみられた北部九州的甕棺は存在せず，糸島や日田地域などで特殊に展開するにすぎない。

5　基数の算出法

地名表では埋葬専用に製作された大形棺・中形棺を対象とするため，日常土器からの転用品とこれらを明確に区別する必要がある。

Ⅰ期（刻目突帯文～伯玄社式）は，壺として大形化はしているものの，日常土器と法量的に隔絶しているわけではなく，また形態的にも埋葬専用として厳密に区別ができないものもあるため，棺として使用されている場合はそのまま算出する。Ⅱ期（金海式～汲田式）は，埋葬専用の大形棺と日常土器からの転用品との区別が法量・形態的にも可能なため，それぞれを大形棺，日常土器からの転用品を含む小形棺と判断して算出する。

Ⅲ期（須玖式・立岩式古）とⅣ期（立岩式新～三津永田式）はかなり複雑な様相をみせる。速水信也は，この段階に棺として用いられた土器を法量から3群7小群に分類している[速水，1985](表3)。速水は，埋葬専用に製作され成人棺と呼ばれてきた甕棺を大形棺と呼び，また橋口が指摘したKⅡb～KⅢaにかけて存在する別系統の甕棺である「小形棺」を中形棺と呼称する。この二つは前節の系列的側面のところで

表3　法量からみた甕棺分類

	法　　量	種　　別	本稿分類	速水分類
器　　高	31～39cm台	日常土器	小形棺	小形棺
	50～57cm台	日常土器がやや大形化したもの		中形棺
	61～72cm台	更に大形化したもの		
		中形棺	大形棺	
	78cm以上	大形棺が縮小したもの		
		大形棺 中形棺の拡大したもの		大形棺

述べた「大形棺」,「中形棺」にあたる。速水は中形棺の特徴として，胴部が丸みを帯びた器形で，口縁部のつくりは簡略，胴部に一条の突帯をめぐらす点を挙げている。

地名表では，速水の法量分析を基本に棺として使用された土器を次のような基準から大形棺，小形棺と大別する(表3)。

まず，埋葬専用棺を目的として製作された土器を大形棺，それ以外の二次利用の棺を小形棺と呼び区別する。大形棺には，速水分類の大形棺，大形棺が縮小したもの，中形棺，中形棺が拡大したものが含まれる。また小形棺には日常土器の甕・壺，およびこれらと法量だけが大きくなった相似形の土器が含まれる。

従来は，成人棺・小児棺として区別する方法が一般的であった。甕棺墓に埋葬される成人・小児の比率が，当時の社会情勢を反映して時期毎に推移することを指摘した研究もある[中間，1978]。しかし，本地名表で大形棺・小形棺として区別するのは，埋葬専用棺を利用することが，北部九州の甕棺墓を理解するうえでもっとも重要な意味をもつとの認識にもとづくからで，本稿の目的の一つが甕棺墓の時間的・地域的境界を明確にすることにあるからである。

たとえば，縄文時代から土器棺葬が存在していることを考慮すれば埋葬専用棺として独自の器形をもち法量的にも大形化している大形棺の存否を指標にすることで甕棺墓の上限をおさえることができる。また弥生時代にはいっても，時期を同じくして遠賀川下流域のような隣接地域で土器棺葬が営まれており，これも大形棺を指標にすることで甕棺墓の分布範囲をおさえることができるのである。さらに地域色研究を進めるうえでも，専門工人の存在が直接関係する大形棺を確実におさえておく必要もあろう。また，資料を扱ううえでも大形棺と小形棺の区別は成人と小児の区別に比べて容易である。成人と小児の厳密な区別は人骨が検出されない限り不可能で，それは大形棺に小児が埋葬される例があることからも明らかである。そのうえ，大形棺分布圏内

における小形棺の埋葬法をみると，成人棺を埋葬後，その上に寄り添うかのごとく埋葬されていることから，遺跡の削平の影響が小形棺の数にただちに反映する点を考慮すれば，成人と小児の比率を算出しても，もっとも遺存が良好な遺跡でないと実態を反映しないという理由もある。

しかし，このように厳密な規定をしても，出土した甕棺口縁部の実測図が掲載されていれば大形棺か小形棺かの再検討も可能だが，このような報告形態がとられるようになったのは最近のことで，ほとんどは再検討が不可能である。このような場合は，報告書の記載に忠実に従っている。基数のあいまいさは多少あると考えられるが，あくまでも目安をつけるための基礎作業としてはやむをえまい。

6　地域設定

井上の研究で，すでに立岩式段階における7つの地域型甕棺が設定されている。筆者は通時的な地域型甕棺の設定を将来の課題としているため，一定の地域枠をつくって地名表に反映させたいと考えた。これはあくまでも地理的条件と現在おさえている大形棺の分布から設定したにすぎず，甕棺自身の型式学的な検討などは一切加えていない。あくまでも便宜的なものである。したがって将来的には変更する余地を十分に残している点は言うまでもない。

（1）　玄界灘沿岸

西北九州　唐津より西の沿岸地域と島嶼部で，長崎県五島，平戸，壱岐，北松浦郡，佐世保市，佐賀県東松浦郡が含まれる。

唐津　旧東松浦郡に属す範囲で現在の佐賀県唐津市，相知町，浜玉町が含まれる。

糸島　旧糸島郡に属す範囲で現在の福岡県糸島郡二丈町，志摩町，前原町，福岡市西区の一部が含まれる。

早良　旧早良郡に属す範囲で，現在の福岡市西区，早良区，城南区が含まれる。井上の藤崎型はこの地域の甕棺である。

福岡・春日　旧筑紫郡に属す範囲で，現在の福岡市南区，博多区，東区の一部，筑紫郡那珂川町，春日市，大野城市，太宰府市北部が含まれる。井上は，一の谷型と原型の二つを設定している。

粕屋　旧粕屋郡に属す範囲で，現在の福岡市東区の一部，粕屋郡志免町，宇美町，古賀町が含まれる。

（2）　有明海沿岸

神埼　旧神埼・三根郡に属す範囲で，佐賀県神埼郡神埼町，千代田町，三田川町，

東脊振村，中原町，三養基郡上峰村，北茂安町，鳥栖市西部が含まれる。

佐賀　旧佐賀郡に属す範囲で，嘉瀬川と城原川に挟まれる地域である。現在の佐賀県佐賀郡大和町，佐賀市，神埼郡神埼町，千代田町が含まれる。

小城　旧小城・旧佐賀郡の一部で，嘉瀬川以西の地域である。現在の佐賀県小城郡小城町，佐賀郡大和町，佐賀市の一部が含まれる。

多久　旧小城郡の一部で，現在の佐賀県多久市に相当する。

武雄　旧杵島郡の一部で現在の佐賀県武雄市，杵島郡北方町が含まれる。

島原　北高来・南高来郡の一部で現在の長崎県小長井町，諫早市，森山町，有明町，島原市，北有馬町が含まれる。

熊本　菊池川流域と白川流域で分離できそうだが，今回は熊本県ということで一括しておく。

筑後南部　旧八女・山門・三池郡に属す範囲で，現在の福岡県筑後市，山門郡瀬高町，八女郡立花町，八女市，大牟田市に相当する。橋口の筑後南部と一致する。

（3）内　陸　部

嘉穂　旧嘉穂郡に属す範囲で福岡県飯塚市，嘉穂郡嘉穂町，穂波町，桂川町を含む。井上の立岩型はこの地域の甕棺である。

二日市　旧筑紫郡の南部に属す範囲で，福岡県筑紫野市の北部に相当する。井上の道場山型はこの地域の甕棺である。

朝倉　旧朝倉郡に属す範囲で，宝満川より東，筑後川より北の地域である。福岡県朝倉郡夜須町，三輪町，甘木市，朝倉町，小郡市の一部を含む。井上の栗山型はこの地域の甕棺である。

小郡・鳥栖　筑前・肥前・筑後の三国地域で福岡県筑紫野市南部，小郡市，佐賀県鳥栖市東部を含む。将来的には鳥栖市地域で独自の地域圏をつくる可能性もある。

久留米　現在の福岡県久留米市を中心とする地域である。

（4）そ　の　他

大村　長崎県大村市富の原遺跡を中心とする地域である。

日田　大分県日田市を中心とする地域で，筑後川中流に位置する。

薩摩　薩摩半島西海岸の地域で，鹿児島県日置郡吹上町，金峰町に相当する。

分布図では，以上示した各地域毎の基数が反映されるように考慮して，先の五期区分のなかで甕棺墓の消長が表現できるようにした。

Ⅲ 分　布

今回作成した分布図には，刻目突帯文土器から曰佐原式まで全時期にわたる分布を表現したもの（図１）と，甕棺大別期毎における大形棺の基数を表現したもの（図２～図６）の二種類ある。

１　全　時　期（図１）

まず，長崎県対馬，福岡県宗像，遠賀川下流域，豊前，豊後，日向，大隅，天草にはまったく分布しない点に注意する必要がある（図１－１）。

次に分布状況をみると，分布範囲は，熊本県宇土半島を南限，大分県日田市を東限，長崎県壱岐を北限，長崎県五島を西限とする地域，及び飛び地的な分布をみせる薩摩である。全時期的には九州の西半に分布し，とくに北部九州地域に集中して分布することを示しているのである。なかでも唐津，糸島，早良，福岡・春日の玄界灘沿岸地域，内陸部地域，神埼，佐賀，小城の有明海北岸地域，熊本県白川流域に集中した分布をみせ，北部九州の範囲と一致している。それでは各地域の甕棺墓はどのように推移していったのであろうか。

２　Ⅰ期（刻目突帯文式～伯玄社式）（図２）

甕棺墓の萠芽期に相当し，刻目突帯文以来の甕棺が存在する段階である。すでにほとんどの地域で甕棺墓が分布するが，型式毎に細かくみると刻目突帯文の段階は，そのほとんどが支石墓の内部主体であったり，支石墓に近接して営まれていることもあって，支石墓の分布と重複するように，西北九州，唐津，糸島，早良，小郡・鳥栖の西部，神埼，佐賀，島原，熊本に偏った分布をとる。規模も５基から10基でさほど大きくない。しかし集落域とは分離されていて縄文的墓地構成とは明らかに異なっている。板付Ⅰ式段階には小郡・鳥栖の東部に，伯玄社式段階になるとようやく福岡・春日，二日市，朝倉，筑後南部へと拡大，墓地の規模も拡大して10基以上群集する例が多くなる。Ⅱ期以降に一般化する弥生的な墓地構成の特徴をすでにみることができるのである。

３　Ⅱ期（金海式～汲田式）（図３）

粕屋，嘉穂，久留米，大村に分布がひろがる。小形棺を含めた総基数では100基を

超える遺跡が出現（福岡市金隈遺跡[112]，同吉武大石遺跡［69］）するが，大形棺に限ると筑紫野市永岡遺跡［174］の99基が最高である（［　］内の数字は遺跡番号で分布図・地名表の番号と一致する）。

嘉穂に大形棺が出現するが，いまだ立岩遺跡周辺には到達せず，二日市方面から嘉穂へはいる入口部にとどまっている。熊本の状況は，在地の刻目突帯文壺から変化をとげてきた壺棺が一掃されると，取って換わるように城ノ越式段階で菊池川流域に，汲田式段階で白川流域に福岡系の大形棺が出現する。しかし墓地の規模はすべて5基以下の小規模なもので，さらに一つの地域の中で大形棺をもたない遺跡と混在して分布している。大形棺をもっていた集団ともたなかった集団が存在したことがわかる。南筑後は筑後市権現塚北遺跡［338］に金海式から群集する傾向がみられる他は，大牟田市羽山台遺跡［334］で汲田式が5基前後みられる程度。久留米では5基以下の甕棺墓が点在する程度である。このように嘉穂，久留米，熊本の甕棺墓は小規模で土器棺葬の遺跡と混在して分布するという様相をみせている。

玄界灘沿岸をみてみると，唐津の甕棺墓は宇木汲田遺跡［30］を除いて5基以下がほとんどで，規模的に小さい。早良，福岡・春日でもようやく甕棺墓が盛行するが，福岡市板付遺跡［102］や同有田遺跡［78］など平野の核となる遺跡では30基以上群集することはなく，むしろ吉武大石遺跡［69］，金隈遺跡［112］など平野の外縁に位置する遺跡で50基以上，群集する傾向がある。板付や有田遺跡ではⅠ期同様に甕棺墓以外の墓制を多く採用していた可能性も考えられる。(9)

内陸部，佐賀平野では規模の点からみれば，二日市［永岡 174］，小郡・鳥栖［安永田 203］，神埼［姫方 207］で50基以上群集する傾向がある。小郡・鳥栖，神埼の大形棺は433基で，福岡・春日，早良の372基に比べてわずかに上回っており，大形棺の規模の点では脊振東南麓に一つの中心があるといっても過言ではあるまい。二列埋葬が盛行するのもこの段階のこの地域なのである。しかし，副葬品の所有形態からみると福岡・春日，早良において圧倒的な集中がみられることはいうまでもない。

以上のように，Ⅱ期は大形棺の点的な久留米以南への伝播と，脊振東南麓における大規模遺跡の集中傾向に特徴づけられよう。

4　Ⅲ期（須玖式～立岩式古）（図4）

嘉穂では立岩遺跡周辺に大形棺が出現するとともに，規模も10基前後の群集を示す。熊本では白川流域に位置する熊本市神水遺跡［299］で9基確認されている他は，全体的に2～3基の小規模傾向が一般的で，甕棺自体も速水の中形棺が顕著である。

西北九州からは大形棺が姿を消し，小形棺がわずかに分布するだけになる。薩摩ではこの段階だけ大形棺が1遺跡1基単位で出現する。

唐津ではⅡ期同様に宇木汲田遺跡における大規模な集中傾向に変化はない。一方，多久でははじめて50基以上の大規模な遺跡が出現，福岡・春日，神埼ではⅡ期と変化なく50基以上の大規模埋葬が継続されるが，佐賀ではほとんど大形棺がみられず，二日市，小郡・鳥栖も10基前後とやや小規模化する。

この時期の副葬品の所有形態に変化があらわれる。Ⅱ期は，副葬品と大形棺が必ずしも結びつくことはなく，木棺墓に多量副葬というパターンも存在したのに対し，Ⅲ期になると，副葬品と大形棺の組み合わせに統一されるようになる。首長の埋葬形式として大形棺が位置づけられ，朝鮮・前漢の青銅器，九州産青銅器，鉄製武器を大形棺に副葬する「形式」が完成したものと考えられる。大村市富の原遺跡［278］や飯塚市立岩堀田遺跡［129］のあり方も周辺地域におけるその典型で，「大形棺＋副葬品」という埋葬形式ごと受容したものと考えられる。さらに大形棺ならどれでもよいというわけではなかったようで，特定の地域で作られた大形棺を持ち込んで埋葬形式を実践する傾向も認められる。

5　Ⅳ期（立岩式新～三津永田式）（図5）

この時期に様相が一変する。日田，武雄，五島で1～2基の小規模ではあるが大形棺がはじめて出現する一方，熊本からは大形棺が姿を消す。

全体的に墓地の規模は縮小するが，Ⅲ期に甕棺墓の規模，副葬品の量と質において頂点をきわめた福岡・春日，神埼，朝倉では甕棺墓自体が衰退し，なかでも福岡・春日ではその傾向が強く，佐賀なども含めて三津永田式の段階までには一斉に他の墓制へ転換する。

これらの地域と入れ替わるように，Ⅲ期にみられた大形棺と副葬品の埋葬形式は福岡県糸島郡前原町三雲遺跡［47-57］周辺で顕著になる。しかし，三雲でももはや大形棺の多数群集はなく，副葬品が1～2基の大形棺に集中的に多量副葬される。立岩遺跡や富の原遺跡では，この段階ではまだ大形棺が首長の埋葬専用棺としての位置をかろうじて保っていたようである。小郡市横隈狐塚遺跡［181］はこの時期における最大の規模をほこるが，これは中期末として分離された遺跡の数がまだ少ないことにも原因があると考えられる。この段階における甕棺墓の中心は二日市，朝倉，小郡・鳥栖，神埼にあり，Ⅲ期に比べ分布圏が一気に縮小するのである。

6　V期（曰佐原式）（図6）

筑後南部の曲松遺跡［330］を除いて群集傾向はみられなくなる。糸島で集中的に分布するものの基本的に5基以下の規模で数基が点在するにすぎないことや，大形棺自体が中形棺の流れをくむことなどから，すでに橋口が説いているように北部九州的甕棺墓ではなく特殊な展開をみせたものである。もはやⅣ期まで集中していた地域にはほとんど存在せず，周辺の大村，嘉穂からも姿を消し，島原や西北九州の島嶼部に小形棺が点在するにすぎない。

Ⅳ　小　　結

Ⅰ期からⅤ期まで順に検討してきた。以下，別の観点から大形棺の分布と規模について若干述べて終わりとしたい。

1　各期毎の最大分布範囲（図7）

図7は，各期毎の最大分布範囲を分布図に表現したものである。

（1）　Ⅰ期　五島（浜郷遺跡）から福岡・春日（中・寺尾遺跡）の玄界灘沿岸と，島原（原山遺跡），熊本（沈目立山遺跡），朝倉（馬田上原遺跡）を結ぶ範囲内。

（2）　Ⅱ期　五島（浜郷遺跡）から粕屋（蒲田遺跡）の玄界灘沿岸，大村（富の原遺跡），島原（妙法塚B遺跡），熊本（畑中遺跡），朝倉（三奈木久保鳥遺跡）を結ぶ範囲内。玄界灘沿岸を東に粕屋までやや拡大するが，基本的にはⅠ期と変わらない。まだ立岩遺跡がある嘉穂盆地まで達していない点に注意する必要がある。

（3）　Ⅲ期　唐津（桜馬場遺跡）から粕屋（鹿部山遺跡）の玄界灘沿岸と，大村（富の原遺跡），熊本（畑中遺跡），嘉穂（立岩堀田遺跡）を結ぶ範囲内と，薩摩である。西北九州の島嶼部には存在せず西限が九州島内に縮小し，東限は嘉穂盆地まで拡大する。玄界灘沿岸では鹿部山遺跡まで到達しもっとも北まで拡大する。

この段階は，島嶼部にこそ大形棺が存在しないが九州島内では最大の分布を示す。この範囲こそ，福岡・春日地域を盟主とする政治的統一体におさめられた北部九州地域と位置づけられるのではと考えている。薩摩に大形棺が出現することは，熊本平野での隆盛と無関係ではない。どこの大形棺が搬出されているか興味深いところである。

（4）　Ⅳ期　五島（宇久松原遺跡）から，粕屋（中ノ坪遺跡）までの玄界灘沿岸と大

村（富の原遺跡），島原（今福遺跡），南筑後（権現塚北遺跡），日田（吹上遺跡），嘉穂（立岩遺跡）を結ぶ範囲内。熊本から姿を消して，南限が南筑後まで後退する反面，日田に大形棺が出現し，筑後川沿いに東限が拡大する。五島に新たに出現するが飛び地的である。薩摩ではもはやみられない。

（5）　Ⅴ期　唐津（久里大牟田遺跡）から粕屋（七夕池南遺跡）の玄界灘沿岸地域と，島原（西の角遺跡），筑後南部（曲松遺跡），日田（草場第2遺跡）を結ぶ範囲内。もっとも分布域が縮小する。粕屋郡宇美町の裏粕屋地域と遠賀川上流に初めて甕棺墓が成立するが，もはや北部九州的甕棺墓ではない。

2　各期毎の各地域における規模の変遷（図8）

各地域で大形棺がいくつ存在したのかその総数を時期別に分布図に表現したものが図8である。その前におことわりしておかなければならないことは，1988年8月現在，約1,800基が検出されている筑紫野市隈・西小田遺跡群，約1,500基が検出されている神埼郡吉野ヶ里遺跡群，約1,200基が検出されている福岡市吉武遺跡群のデータが含まれていないことである。しかし，これらの遺跡の存続幅，中心となる時期，大形棺と小形棺の比率からみても，この分布図に示された内容に大きな差はないと考えられる。[10)]

さて，先に分布からみた大形棺の範囲と比べてみると，いわゆる北部九州的甕棺墓と考えうる特徴（10基以上で群集するなど）をみたしている遺跡の分布は，さらにせまばり地域的にも集中していることがわかる。すなわちⅢ期の嘉穂地域を除けば，唐津，糸島，福岡・春日，粕屋，二日市，朝倉，小郡・鳥栖，神埼，佐賀，小城，多久に限定された分布を示している。これらが，大形甕棺墓の中心地域として改めて認識できる。あまり意味はないが，小形棺や時期不明を加えたⅠ～Ⅴ期の総基数を示したものが図8－1である。中心地域における集中度に変化はない。

福岡・春日地域は，甕棺墓を採用するのが伯玄社式段階とかなり遅く，また他の墓制への転換も桜馬場式段階とかなり早い。Ⅱ・Ⅲ期の短期間のうちに「大形棺＋副葬品」を首長の埋葬形式として急速に確立し，副葬品を多量に副葬する。立岩遺跡におけるⅢ期段階の隆盛もこの様な意味付けと結び付いていたことは明らかである。

しかしⅣ期になってその意味付けが転換するやいなや，別の埋葬形式に急速に転換していくのである。

一方，刻目突帯文土器段階から長胴壺を利用した壺棺葬の伝統をもつ多久から神埼にかけての有明海北岸地域などでは，神埼，小郡・鳥栖を中心に多数の甕棺埋葬を延

表4　地域毎の時期別基数

地　域	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	大形棺計	時期不明	補正大形棺計	甕棺総基数
西北九州	31	20	3	1	2	57	36	75	147
唐　津	26	64	50	13	2	155	123	217	320
糸　島	76	25	23	12	96	232	49	257	251
早　良	11	167	100	10	9	297	1,120	857	1,626
福岡・春日	36	205	374	12	8	635	788	1,029	2,086
粕　屋	0	14	13	2	3	32	47	56	81
嘉　穂	0	2	30	2	1	35	9	40	322
二日市	40	20	30	40	0	130	35	148	253
朝　倉	2	54	143	52	3	254	390	449	838
小郡・鳥栖	29	253	110	115	2	509	1,847	1,433	2,726
神　埼	19	180	147	32	0	378	2,420	1,588	3,009
佐　賀	39	86	34	2	5	166	208	270	597
小　城	38	70	3	9	0	120	174	207	335
多　久	0	42	91	2	0	135	35	153	272
武　雄	3	2	0	9	0	14	0	14	27
大　村	0	1	7	7	0	15	0	15	30
島　原	3	1	5	5	1	15	15	23	35
熊　本	31	8	50	0	0	89	24	101	152
南筑後	9	52	7	4	22	94	167	178	295
久留米	2	5	19	2	4	32	98	81	268
日　田	0	0	0	3	3	6	14	13	19
鹿児島	0	0	3	0	0	3	0	0	3
合　計	395	1,271	1,242	334	161	3,403	7,599	7,220	13,692

(注)1　ⅠからⅤは，大形棺の時期別基数（個体数ではない）。
2　「大形棺計」は，ⅠからⅤ期の大形棺の総基数（Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅳ＋Ⅴ）。
3　「時期不明」は，所属時期が不明な甕棺墓の基数。大形棺，小形棺を含む。
4　「補正大形棺計」は，時期不明の甕棺墓を構成する大形棺と小形棺の比率を1：1と推定して算出した大形棺と，所属時期が明らかな大形棺の基数とを合わせた大形棺の補正した総基数（大形棺計＋時期不明/2）。
5　「甕棺総基数」は，時期不明もあわせた大形棺と小形棺の総基数（補正大形棺計＋小形棺）。
（この表には所属時期が明らかな小形棺の基数は提示していない。）

々と継続するのである。Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ期には副葬品を伴う大形棺もあるが，そのあり方は福岡県須玖岡本遺跡や三雲遺跡とは異なり，むしろ立岩遺跡，福岡県夜須町東小田峯遺跡，富の原遺跡のあり方に近い。有明海北岸地域に関しては，一部首長層が「大形棺＋副葬品」の埋葬形式を実践するが，これは甕棺墓に対する憧れといったものではなく，福岡・春日地域と同じ埋葬形式をとることで，地域的盟主の位置を確保するという政治的手段と考える必要がある。しかし大部分の甕棺に埋葬される人々は，刻目突帯文土器以来の土器棺葬の伝統上で，大形甕棺葬を極端に展開させたと考えるほうがこの地域の特質を正しく認識することになるだろう。

今後，型式学的な検討が地域毎に進めば地域間の大形棺の移動が明らかとなってく

る。例えば立岩遺跡の10号甕棺は二日市地域の道場山型とされ，富の原遺跡にも北部九州的な大形棺が持ち込まれているという。また，熊本における北部九州系大形棺と在地甕棺の関係，黒髪式土器との関係，島原や薩摩における熊本系中形棺の存在など検討すべき課題は多い。本稿で行った基礎作業がこれらの一助となれば，目的は達せられたことになる。多くの方々のご叱正をいただければ幸いである。

謝　辞

小稿は1981年に『末盧国』を製作する際，甕棺が100基以上出土している遺跡のリストを用意したことが基礎となっている。その後，横山浩一先生から甕棺の分布についてまとめるよう教唆された。1987年に西日本における弥生時代遺跡のデータベースを作成する機会があり，当時九州大学の学生だった川上洋一，塩見充子，重藤輝行，渋谷 格，高久健二，中村真由美氏の協力を得て資料化した遺跡情報カードに負うところが多い。

今回，まとめるにあたっては，草場啓一氏(筑紫野市教育委員会)，速水信也氏（小郡市教育委員会)，森田孝志氏（佐賀県教育委員会)，久保伸洋氏（東脊振村教育委員会）から多くの御教示をいただいた。そして指導と激励をいただいた春成秀爾氏に感謝したい。記して深謝する。

（本研究は，昭和62年度文部省科学研究費補助金奨励研究A「西日本における水稲耕作受容期の研究」の成果の一部である。）

（1988. 10. 31　稿了）

註

（1） 器高が1mを超えるような大形品であるため，女性による日常的土器製作とは考えにくいということが一つと，ある地域に特徴的な甕棺が別の地域に持ち込まれている事実からみて，商品的性格を備えている。この様な事実関係を考慮すれば社会から特殊な職能集団として認められた専門工人の存在が浮かび上がってくるのである。

（2） 直立・倒置の埋置形態，覆口の多さを指摘している。

（3） 西は，外来系として福岡と記述しているが，具体的にどの地域を指すのか明示していない。

（4） 柳田康雄の金海式中期初頭説［柳田，1985］など，若干の見解の差があることも事実である。

（5） もっとも森が甕棺編年を発表した1968年当時は，土器が社会を規制すると考えていたこともあって社会の発展段階を考慮にいれた相対区分であったわけだが，資料数の増加にともない，社会が土器を規制するという考えが普及してくるようになって，この傾向は顕著になったといえよう。

（6） 各氏編年と森編年との併行関係は，それぞれの研究者の意見に従っている。本稿編年と森編年との対応について，ここではふれておく。表1をみればわかるように汲田・立岩・桜馬場・曰佐原式について操作している。

まず，汲田・桜馬場・曰佐原式は，森編年以降の調査で存在が明らかにされた型式を包括して設定した。現在まで提出されてきた編年が，森編年の延長線上にある以上，森編年の型式を軸に時期区分をおこなった方が，報告されている甕棺の時期を設定するにあたって最も有効で正確と考えたからである。立岩式に関しては，二つに細分して橋口のKⅢb・KⅢcにあわせることで，後述するような甕棺墓の分布動態との対応を計るためである。本来ならこれらの操作は，型式学的な検討のうえで加えるべきだがまた改めて論じたいと考えている。型式名を増やせば対応も難しくなり煩雑さも増すことを考慮して幅をもたせておくことの利点を優先させた結果である。

（7） 刻目突帯文土器の埋葬専用の壺についてはすでに長胴壺との名称を与えており［藤尾，1984］，金海式へといたる型式組列については別稿を用意している（『横山浩一先生退官記念論文集』仮称）。

（8） 相対区分は採用しないといったものの，便宜的に補足しておく。

刻目突帯文土器＝早期

板付Ⅰ式＝前期初頭

（9） 板付遺跡周辺では，那珂沼口遺跡で伯玄社式が2基確認されているだけで早良も含めて墓地に関しては貧弱な内容となっている。これは調査が進めば例がふえるのか，埋葬形式の差なのか断定できないが，後者の可能性が高いと考えている。

（10） 前期末から中期後葉の時期に属する甕棺墓に埋葬された成人と小児の比率を算出した中間研志の研究によれば，時期によってバラツキがあることが判っている。ほぼ4：6から8：2の間を推移しているが，概して成人の比率がやや高いことが判る。ここでは，成人と小児が大形棺と小形棺にそれぞれ埋葬されたと仮定し，さらに成人と小児の比率を1：1と最小限に見積り，吉武，隈・西小田，吉野ケ里などを含めた大形棺の基数を地域毎に算出してみたものである。

参考文献

井上裕弘「甕棺製作技術と工人集団」（『論集日本原始』，吉川弘文館，東京，1985）。

井上裕弘「甕棺製作技術と工人集団把握への試論」（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』9，福岡県教育委員会，1978）。

大神邦博「福岡県糸島地方の弥生後期甕棺」（『古代学研究』53，1968）。

岡崎　敬「日本考古学の方法」（『古代の日本』9，角川書店，東京，1971）。

岡崎　敬「鏡とその年代」（『立岩遺蹟』河出書房新社，東京，1977）。

折尾　学『金隈遺跡第2次調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書17，1971）。

小田富士雄「初期筑紫王権形成史論―中国史書にみえる北部九州の国々―」（『東アジアの考古と歴史』中，岡崎敬先生退官記念論集，同朋舎出版，京都，1987）。

河口貞徳「入来支石墓調査概要」（『東アジアより見た日本古代墓制研究』，1976）。

佐々木隆彦「栗山遺跡出土甕棺の編年的位置」（『栗山遺跡』甘木市文化財調査報告12，1982）。

七田忠昭「二塚山出土甕棺とその編年」（『二塚山』佐賀県文化財調査報告書46，1979）。

高倉洋彰「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」（『考古学研究』78，1973）。

高倉洋彰「大形甕棺の編年について―とくに型式設定の手続きの問題に関して―」（『九州歴史資料館研究論集』4，1978）。

高島忠平「甕棺の編年」（『立岩遺蹟』，河出書房新社，東京，1977）。

土肥直美・田中良之「古墳時代の抜歯風習」（『日本民族・文化の生成』，六興出版，東京，1988）。

中島直幸「甕棺墓について」（『柏崎小長崎遺跡』，唐津市埋蔵文化財調査報告6，1983）。

中間研志「結語」(『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』6，福岡県教育委員会，1978)。
中間研志「甕棺墓について」(『九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告』24下巻，福岡県教育委員会，1978)。
西健一郎「熊本県における弥生中期甕棺編年の予察」(『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』，福岡，1982)。
萩原裕房「安国寺遺跡の甕棺について」(『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書』2，久留米市文化財調査報告書36，1983)。
橋口達也「弥生時代の遺物　A　甕棺」(『九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告』25，福岡県教育委員会，1978)。
橋口達也「甕棺の編年的研究」(『九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告』31，福岡県教育委員会，1979)。
橋口達也「甘木・朝倉地方甕棺についての若干の所見」(『栗山遺跡』甘木市文化財調査報告12，1982a)。
橋口達也「甕棺のタタキ痕」(『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』，福岡，1982b)。
橋口達也「南筑後における甕棺の編年」(『権現塚北遺跡』—福岡県山門郡瀬高町坂田所在遺跡群の調査—，瀬高町文化財調査報告書3，1985)。
速水信也「総括」(『横隈狐塚遺跡Ⅱ』，小郡市文化財調査報告書27，1985)。
春成秀爾「弥生時代九州の居住規定」(『国立歴史民俗博物館研究報告』3，1984)。
平島勇夫「甕棺について」(『羽山台遺跡』—福岡県大牟田市大字草木所在羽山台D・E・F地点の調査—，大牟田市文化財調査報告書16，1982)。
藤田　等「甕棺墓」(『弥生文化の研究』8—祭と墓と装い—，雄山閣，東京，1987)。
森貞次郎「弥生時代における細形銅剣の流入について—細形銅剣の編年的考察—」(『日本民族と南方文化』，平凡社，東京，1968)。
森田孝志「総括」(『金立開拓遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書4，佐賀県文化財調査報告書77，1984)。
柳田康雄「甘木市・朝倉郡を中心とした甕棺の一考察」(『埋もれていた朝倉文化』，1973)。
柳田康雄「伊都国の考古学—対外交渉のはじまり—」(『大宰府古文化論叢』上巻，吉川弘文館，東京，1983)。

〔補記〕

脱稿後，佐賀県吉野ケ里遺跡が話題となり，1989年3月現在で甕棺総数は2,000基を超えたという。筆者が調べた時点に比べ500基程増えている。このうち大形棺が半分の250基と見積れば大形棺の総数でも福岡・春日地域と肩を並べるまでになり，神埼地域への集中度が高いことに改めて認識させられた。開発の度合を考えれば脊振南麓ではますます数の増加が予想されるため，この傾向はさらに強まっていくだろう。

甕棺墓地名表（1988年8月現在）

1　本地名表は，九州の大形棺を対象としている。したがって，日常土器を転用した土器棺は含めていない。ただし大形甕棺墓が分布する地域に所在する土器棺は含めている。分布図上における大形甕棺と土器棺の区別は黒塗りと白ヌキの記号で表現している。

2　「甕棺」が出土したと報告されていても，所属時期，基数，大形棺か土器棺かの区別がすべて不明なものは省略している。

3　基数の記入は，各型式毎におこなっているが，Ⅱ期以降は各型式毎の「大形棺」の数を左側に，「小児棺および不明」の数を右側にそれぞれ記入している。単棺，複棺にかかわらず大形棺1基として算出している。個体数ではない。

4　報告書のなかには，甕棺墓の存続幅のみ記している場合も多い。これらについては存続幅を矢印で表現した。そして存続幅が本稿の甕棺大別期の幅内におさまる場合は，該当する大別期のところに大形棺の基数を，小形棺及び不明棺は時期不明の項に基数を記入している。また，幾かの大別期にまたがる場合は時期不明の項に記入している。（藤尾）

凡　例

遺跡番号　分布図の番号と一致する。
同じ遺跡で地点を異にしたり，調査年度を異にするものには原則として同じ番号をつけている。

遺 跡 名　遺跡名の後の数字は調査年（西暦）の下ふた桁である。

所 在 地　県，丁目，番地，小字は省略している。

Ⅰ ～ Ⅴ　各大別期毎の大形棺の総基数である。

大形棺計　全期間の大形棺の総基数である。

総　　計　大形棺計に小形棺および不明の基数を加えた全期間の総基数である。

調 査 年　甕棺の調査が開始された年，もしくは甕棺が発見された年である。

文献番号　文献目録の番号と一致する。

遺跡番号	遺跡名	所在地	I 期			II 期				III 期	
			刻突	飯付 I	伯玄社	金海	城ノ越	汲田		須玖	立岩古
1	浜郷	南松浦郡有川町			3		4	1			
2	笛吹	北松浦郡小値賀町					4				
3	殿寺	北松浦郡小値賀町			4				2		
4	宇久松原'68	北松浦郡宇久町平郷			4	1	6				
	'77			1	6	2	4		5		
5	津吉	平戸市津吉町				1			2		
6	宮の本	佐世保市高島町							3		
7	大野台	北松浦郡鹿町町深江免	1								
8	度島中学校運動場	平戸市度島町						2			2
9	原の辻2次	壱岐郡石田町									
	3次										1
10	橋本	伊万里市二里町							20	3	
11	押川	東松浦郡肥前町大字納所			1	2	4				
12	鳥の巣	東松浦郡鎮西町大字波戸									1
13	大友1次	東松浦郡呼子町大字大友				3	1	3	1		
	2次					3					8
	3，4次				11						1
14	鼓	唐津市湊町		←							
15	湊中野	唐津市湊町					←				
16	山下町五丁目	唐津市山下町					←				
17	桜馬場	唐津市桜馬場								1	
18	菜畑	唐津市菜畑	1								
19	巡見道	唐津市菜畑									
20	中原1次	唐津市原		1				1	1	1	2
	3次									3	
21	久里大牟田'52	唐津市久里大牟田						5		1	1
	'79							1	1		1
22	田島	唐津市柏崎									4
23	瀬戸口	唐津市大字宇木		4							
24	森田支石墓群	唐津市大字宇木					1				
25	山本	唐津市山本									

Ⅳ期			Ⅴ期	時期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	大形棺計	総計	調査者	調査年	文献番号
立岩新	桜馬場	三津	日佐原	不明										
					3	1	0	0	0	4	10	内藤芳篤	1967	1
					0	0	0	0	0	0	4	小値賀町教委	1982	2
					4	0	0	0	0	4	6	正林護	1977	3
	1				4	7	0	1	0	12	12	内藤芳篤	1968	1・4
			1		7	0	0	0	0	7	19	正林護他	1977	5
					0	0	0	0	0	0	3	萩原博文	1983	6
					0	0	0	0	0	0	3	久村貞夫		7
					1	0	0	0	0	1	1	賀川光夫	1976	8
					0	2	0	0	0	2	4			9
		4			0	0	0	0	0	0	4	正林護	1976	10
			2		0	0	0	0	2	2	3	正林護	1977	11
					0	0	3	0	0	3	23	盛峰雄	1987	12
					1	0	0	0	0	1	7	森田孝志	1980	13
					0	0	0	0	0	0	1	川崎吉剛	1981	14
					0	7	0	0	0	7	8	河児哲志	1968	15
					0	3	0	0	0	3	11	木下之治	1970	16・17 18
					11	0	0	0	0	11	12	木村幾多郎	1979	15
→				29							29	堀川義英	1971	32
→		→		7							7	唐津市教委	1983	19
→				10							10	河児哲司	1961	32
	1				0	0	1	1	0	2	2	工事中	1944	20
					1	0	0	0	0	1	1	中島直幸	1980	21
		2			0	0	0	0	0	0	2	東中川忠美	1980	22
					1	1	3	0	0	5	6	伊藤奎二	1965	23
					0	0	3	0	0	3	3	唐津市教委	1987	24
	1		1	6	0	5	2	1	1	9	15	工事中	1952	25
			1		0	1	1	0	1	3	4	中島直幸	1979	25
	2	2			0	0	4	4	0	8	8	木下巧	1978	26
					4	0	0	0	0	4	4	木下之治	1957	27
					0	1	0	0	0	1	1	九州大学	1966	28
				1	0	0	0	0	0	1	1	工事中	1932	29

遺跡番号	遺跡名	所在地	I 期			II 期						III 期			
			刺突	板付I	伯玄社	金海		城ノ越		汲田		須玖		立岩古	
26	徳武石崎	唐津市徳武													
27	伊岐佐中原	東松浦郡相知町伊岐佐													
28	宇木汲田'66	唐津市大字宇木			9	14	6	9	4	23	6	15	12	11	1
	'83			←			→								
	'84													1	
	'86				←		→								
29	萬籠A	唐津市大字半田			6	←		6	→		3				
30	葉山尻	唐津市葉山尻						←						8	
31	柏崎小長崎	唐津市柏崎		1	3	1				3	1				
32	柏崎松本	唐津市柏崎										1	1		
33	山添	唐津市鏡山						←							
34	五反田	東松浦郡浜玉町五反田		1											
35	吉井松原	糸島郡二丈町大字吉井												1	
36	竹戸II	糸島郡二丈町大字吉井													2
	III										2				
37	広田	糸島郡二丈町大字吉井													
38	新町1次	糸島郡志摩町大字新町	3			1									
	2次		1	1	1		2		1						
39	御床松原	糸島郡志摩町大字御床													1
40	石崎曲り田	糸島郡二丈町石崎上深江			22										
41	伏龍A地区	糸島郡前原町大字篠原													
42	篠原新建1次	糸島郡前原町大字篠原				1		7	30	6	4				
	2次								5			4	5		1
43	志登	糸島郡前原町志登	1	1	1							5			
44	井原D	糸島郡前原町大字井原										1			3
45	井原上学	糸島郡前原町大字井原													
46	井原鑓溝	糸島郡前原町大字井原													
47	三雲南小路	糸島郡前原町大字三雲												2	
48	三雲堺	糸島郡前原町大字三雲												1	1
49	三雲八龍	糸島郡前原町大字三雲								1		6	1	3	
50	三雲寺口	糸島郡前原町大字三雲		1							1				
51	三雲加賀石	糸島郡前原町大字三雲		9											

Ⅳ期			Ⅴ期	時期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	大形棺計	総計	調査者	調査年	文献番号
立岩新	桜馬場	三津	日佐原	不明										
				1	0	0	0	0	0	1	1	工事中	1929	30
	1				0	0	0	1	0	1	1	藤井伸幸	1983	31
	3 1	1		1 12	9	46	26	4	0	86	128	九州大学	1966	32
												唐津市教委	1983	33
					0	0	1	0	0	1	1	九州文化史	1984	34
				6	0	0	0	0	0	0	6	唐津市教委	1986	33
				23	6	6				12	38	佐賀県教委	1973	35
→				16			8			8	24	松尾禎作	1956	36・37
					4	4	0	0	0	8	9	中島直幸	1982	38
	2				0	0	1	2	0	3	4	中島直幸	1980	39
→				50							50	不明	1969	40
					1	0	0	0	0	1	1	木下之治	1954	41
					0	0	1	0	0	1	1	島田寅次郎	1922	42
					0	0	0	0	0	0	2	馬田弘稔	1978	44
					0	0	0	0	0	0	2	佐々木隆彦	1978	43
				1	0	0	0	0	0	0	1	小池史哲	1978	45
					3	1	0	0	0	4	4	橋口達也	1986	46
					3	0	0	0	0	3	6	橋口達也	1987	47
					0	0	0	0	0	0	1	井上裕弘	1982	48
					22	0	0	0	0	22	22	橋口達也	1979	49
		2			0	0	0	2	0	2	2	川村博	1980	50
					0	14	0	0	0	14	48	副島邦弘	1980	51
				1	0	0	4	0	0	4	16	川村博	1982	51
					3	0	5	0	0	8	8	鐃山猛	1953	52
				5	0	0	1	0	0	1	9	川村博	1981	53
			1		0	0	0	0	1	1	1	川村博	1984	54
		1			0	0	0	1	0	1	1		1822	55
					0	0	2	0	0	2	2	柳田康雄	1977	56
	4				0	0	1	0	0	1	6	小池史哲	1980	57
7 4	2 3				0	1	9	9	0	19	27	柳田康雄	1979	57
			1		1	0	0	0	1	2	3	小池史哲	1980	57
					9	0	0	0	0	9	9	柳田康雄	1974	58

遺跡番号	遺跡名	所在地	I期			II期				III期	
			刻実	板付I	伯玄社	金海	城ノ越	汲田		須玖	立岩古
52	三雲石橋	糸島郡前原町大字三雲			8						
53	三雲郡の後	糸島郡前原町大字三雲								1	
54	三雲中川屋敷	糸島郡前原町大字三雲									
55	三雲柿木	糸島郡前原町大字三雲					4				
56	三雲仲田	糸島郡前原町大字三雲		2	7						
57	三雲屋敷	糸島郡前原町大字三雲							1		
58	飯氏馬場	福岡市西区大字飯氏				3	1	2			
59	今宿横浜(13地点)	福岡市西区今宿							2		
60	今宿松原	福岡市西区今宿			8						
61	青木	福岡市西区今宿									
62	野方久保	福岡市西区大字野方				←					
63	野方中原	福岡市西区大字野方									
64	野方塚原	福岡市西区大字野方									
65	羽根戸	福岡市西区羽根戸						6		2 1	
66	吉武I次	福岡市西区大字吉武				←					
67	II次	福岡市西区大字吉武								2	
68	吉武樋渡(III)	福岡市西区大字吉武						←			
69	吉武大石(V)	福岡市西区大字吉武				49	13	22		47	41
70	吉武IV次	福岡市西区大字吉武				←					
	IV次					25					
	吉武高木(IV)					16 18					
71	四箇 J-101	福岡市早良区四箇						5	3		
72	中通・内野熊山	福岡市早良区入部					←				
73	重留岩隈	福岡市早良区重留				←	- -	- -			
74	飯倉六丁目	福岡市早良区飯倉				←→					
75	飯倉四丁目	福岡市早良区飯倉						←			
76	飯倉丸尾	福岡市早良区飯倉				1					
77	西福岡高校	福岡市早良区有田				1	1	←		→	
78	有田36次	福岡市早良区小田部		2							2
	48次				2						
	59次					1					

Ⅳ期			Ⅴ期	時期	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	大形棺	総	調査者	調査年	文献番号
立岩新	桜馬場	三津	曰佐原	不明	期	期	期	期	期	計	計			
					8	0	0	0	0	8	8	柳田康雄	1977	59
					0	0	0	0	0	0	1	柳田康雄	1977	58
			1		0	0	0	0	1	1	1	小池史哲	1980	57
					0	4	0	0	0	4	4	柳田康雄	1977	59
					9	0	0	0	0	9	9	柳田康雄	1977	59
					0	0	0	0	0	0	1	柳田康雄	1977	59
	2		1		0	5	0	0	1	6	9	副島邦弘	1970	60
					0	0	0	0	0	0	2	折尾学	1976	61
					8	0	0	0	0	8	8	福岡市教委	1969	62
			1		0	0	0	0	0	0	1	二宮忠司	1985	63
→	→			67							67	力武卓治	1987	
			2 1		0	0	0	0	2	2	3	柳田純孝	1973	64
			3		0	0	0	0	3	3	3	福岡市教委	1975	62
					0	6	2	0	0	8	9	小畑弘己	1984	65
→				260							260	横山邦継	1981	66
					0	0	2	0	0	2	2	横山邦継	1982	66
→				140							140	下村智	1983	67
				31	0	84	88	0	0	172	203	福岡市教委	1985	68
→	→			500							500	横山邦継	1983	66
				7	0	25	0	0	0	25	32	横山邦継	1983	66
					0	16	0	0	0	16	34	横山邦継	1983	66
					0	5	0	0	0	5	8	二宮忠司	1979	69
→				10							10	福岡市教委	?	70
				50	0	0	0	0	0	0	50	佐藤一郎	1988	
												?	1963	70
→												福岡市教委	1979	71
					0	1	0	0	0	1	1	森貞次郎		72
				7		2				2	9	森貞次郎	1949	72
					2	0	2	0	0	4	4	福岡市教委	1980	73
					2	0	0	0	0	2	2	井沢洋一	1982	74
					0	1	0	0	0	1	1	井沢洋一	1981	75

遺跡番号	遺跡名	所在地	I期			II期					III期			
			刻突	板付I	伯玄社	金海		城ノ越	汲田		須玖		立岩古	
78	有田64次	福岡市早良区小田部							1		7	1	9	5
	86次						4							
	小田部五丁目													
79	姪浜新町	福岡市西区姪浜町											1	1
80	藤崎2地点	福岡市早良区藤崎												
	4地点	福岡市早良区高取		1										
	1次	福岡市早良区藤崎			3	7			12	45			17	
	2次	福岡市早良区高取												
	8地点(4次)	福岡市早良区百道										2		
	7地点(5次)	福岡市早良区藤崎	1		1									
	6次	福岡市早良区高取												
	7次	福岡市早良区藤崎							3		3	3	1	3
	8次	福岡市早良区高取										1		1
	10次								3		1	1	1	
	11次												2	2
81	西新町'74	福岡市早良区西新						←						
	'76										6	9		8
82	浄泉寺	福岡市城南区片江			1		2							
83	カルメル修道院	福岡市城南区田島				1	1							
84	宝台	福岡市城南区樋井川								2	3	4	1	4
85	丸尾台	福岡市城南区大字堤												
86	門田遺跡 述田地区	春日市上白水				1	8						2	8
87	門田地区						1		34		14		←	
88	油田	筑紫郡那珂川町中原									←			
89	原	春日市上白水												
90	松木138街区	筑紫郡那珂川町松の木		↔		↔								
	仲6地点(宗石)							←						
	10地点					2	8							
	松木140街区				13									
91	一の谷	春日市大字上白水											22	7

Ⅳ期			Ⅴ期	時期		Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	大形棺計	総計	調査者	調査年	文献番号
立岩新	桜馬場	三津	曰佐原	不明											
	2 6				2	0	1	16	2	0	19	33	井沢洋一	1981	76
						0	0	0	0	0	0	4	井沢洋一	1983	77
					2	0	0	0	0	0	0	2	福岡市教委	1980	70
						0	0	1	0	0	1	2	島津義昭	1972	78
				1		0	0	0	0	0	1	1	中山平次郎	1917	79
						1	0	0	0	0	1	1	福岡市教委	1975	80
	3		1			3	19	17	3	1	43	88	折尾学	1977	81
					60	0	0	0	0	0	0	60	福岡市教委	1977	83
						0	0	0	0	0	0	2	福岡市教委	1980	82
			2			2	0	0	0	2	4	4	福岡市教委	1980	82
					5	0	0	0	0	0	0	5	福岡市教委	1982	80
	2 2			1	1	0	3	4	2	0	10	19	井沢洋一	1983	83
						0	0	0	0	0	0	2	田中寿夫	1983	80
					4	0	3	2	0	0	5	10	井沢洋一	1984	80
						0	0	2	0	0	2	4	山崎龍雄	1985	80
→			→		30							30	福岡市教委	1974	70
	1 5		1			0	0	6	1	1	8	30	池崎譲二	1976	70
						1	0	0	0	0	1	3	塩屋勝利	1981	84
						0	1	0	0	0	1	2	山崎純男	1974	85
	1				1	0	0	4	1	0	5	16	緒方勉	1969	86
	1					0	0	0	1	0	1	1	中原志外顕	1963	87
	1	1			4	0	1	2	1	0	4	25	福岡県教委	1977	88
→	→				34		34	14			48	86	福岡県教委	1974	89
→	→		1							1	1	1	福岡県教委	1974	90
				23	113	0	0	0	0	0	23	136	木下修	1974	91
					37	0	0	0	0	0	0	34	井上裕弘	1975	92
→	←	1	→		60							60	新原正典	1986	92
						0	2	0	0	0	2	10	川述昭人	1978	92
						13	0	0	0	0	13	13	那珂川町教委		93
	3					0	0	22	0	0	22	32	宮小路賀宏	1968	94

遺跡番号	遺跡名	所在地	I 期			II 期						III 期			
			刻突	板付I	伯玄社	金海		城ノ越		汲田		須玖		立岩古	
91	一の谷A	春日市大字上白水												94	75
92	大谷	春日市大字小倉										←		→	
93	向谷南	春日市春日向谷・平田													
94	西平塚A	春日市大字小倉						9	4	35	17				
	B・C					←				→					
95	伯玄社	春日市大字小倉			13								118		
96	赤井手	春日市大字小倉								4	21			2	2
97	須玖岡本	春日市大字須玖										1			
	B'17														
	B'29									1		3		3	
	C													1	
	E											←		→	
	G									3		2		4	
98	岡本町四丁目	春日市岡本町													
99	岡本 '84	春日市岡本町						←							
100	高辻B	春日市高辻										10		12	1
	C														5
101	諸岡2次	福岡市博多区諸岡										24	19		3
	3次							←							
	16次							←							
102	板付I区	福岡市博多区板付				5	1		3	16	19	9	10	1	
	田端（BI）					6									
	G－5b														
	G－5a					1				2	37	1	1		
103	那珂沼口	福岡市博多区那珂			2										
104	那珂7次	福岡市博多区那珂													
105	比恵1次	福岡市博多区比恵												←	
	2次	福岡市博多区比恵小林町												←	
	瑞穂	福岡市博多区博多駅南								1	2	1	1	3	
	比恵6次									6		7		14	5
	8次								3	←		→			2

Ⅳ期			Ⅴ期	時期		Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	大形棺計	総計	調査者	調査年	文献番号
立岩新	桜馬場	三津	曰佐原	不明											
						0	0	94	0	0	94	169			
					3	0	0	5	0	0	5	8	佐々木隆彦	1977	95
	←	→			60							60			
						0	44	0	0	0	44	65	伊崎俊秋	1978	96
					9	0	7	0	0	0	7	16	秀嶋龍男	1980	97
					9	13	0	0	0	0	13	140	松岡史他	1966	98
						0	4	2	0	0	6	29	佐々木隆彦	1976	99
						0	0	1	0	0	1	1		1899	100
					40	0	0	0	0	0	0	40	中山平次郎	1917	101
					3	0	1	6	0	0	7	10	京都帝国大学	1929	102
						0	0	1	0	0	1	1	京都帝国大学	1929	102
	3					0	0	12	3	0	15	15	鏡山猛	1962	100
1	1				2	0	3	6	1	0	10	13	佐々木隆彦	1979	103
					300	0	0	0	0	0	0	300	丸山康晴	1979	104
→					3							3	春日市教委	1984	105
				18	13	0	0	22	0	0	40	54	井上裕弘	1971	106
	2				1	0	0	0	2	0	2	8	井上裕弘	1971	106
	1			1	5	0	0	24	1	0	26	53	横山邦継	1973	111
→				6	3						6	9	福岡市教委	1974	112
→	→				14							14	柳沢一男	1982	113
					1	0	21	10	0	0	31	65	福岡市教委	1974	108
						0	6	0	0	0	6	6	中山平次郎	1916	107
			1			0	0	0	0	0	0	1	横山邦継	1980	110
					1	0	3	1	0	0	4	43	山口譲治	1975	109
						2	0	0	0	0	2	2	力武卓治	1980	114
			1			0	0	0	0	1	1	1	田中寿夫	1985	115
→	→				12							12	鏡山猛	1934	116
→	→				18							18	森貞次郎	1952	116
				2	2	0	1	4	0	0	7	12	吉岡完祐	1979	117
	1	1		1	3	0	6	21	1	0	29	38	横山邦継	1982	116
				6	2						6	13	柳沢一男	1984	118

遺跡番号	遺跡名	所在地	I 期			II 期						III 期			
			刻突	板付I	伯玄社	金海		城ノ越		汲田		須玖		立岩古	
106	博多・祇園町 I区	福岡市博多区馬場新町								2	4				
	博多・店屋町 A・B区	福岡市博多区御供所町 東長寺前								5	8				
	博多・店屋町 C・D区									2	2				
	博多22次	福岡市博多区冷泉町						←							
	博多24次									1					
107	下臼井甕棺墓	福岡市博多区下臼井						←							
108	中尾第1地点	福岡市博多区席田									1				
109	宝満尾	福岡市博多区下月隈												6	
110	上月隈	福岡市博多区上月隈						←							
111	下月隈宮ノ後	福岡市博多区下月隈												5	12
112	金隈	福岡市博多区金隈				7	22			55	27	100	77	17	29
113	ヒケシマ	大野城市御笠川										1			
114	中・寺尾1次	大野城市大字中			8				6			4			
	2次				←→										
115	陣ノ尾2次	太宰府市大字水城													
116	ウソフキ	粕屋郡宇美町大字井野													
117	七夕池南	粕屋郡志免町田富													
118	辻畑	粕屋郡粕屋町大字大隈						2	3			1		4	3
119	蒲田水ケ元	福岡市東区大字蒲田						←							
120	蒲田A	福岡市東区大字蒲田								4		1	1		
	D									8	1	4	3		
121	鹿部山	粕屋郡古賀町大字鹿部												3	
122	中ノ坪	粕屋郡古賀町大字新原													
123	山村	飯塚市川島、山村									1				
124	太田種鶏場	飯塚市立岩												2	
125	市営グランド	飯塚市立岩												3	
	市営グランド 東斜面													3	
126	立岩小学校	飯塚市立岩													
127	龍王寺	飯塚市立岩												4	
128	熊野神社	飯塚市立岩										←→			

Ⅳ期			Ⅴ期	時期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	大形棺計	総計	調査者	調査年	文献番号
立岩新	桜馬場	三津	曰佐原	不明										
					0	2	0	0	0	2	6	折尾学	1977	119
					0	5	0	0	0	5	13	折尾学	1977	120
					0	2	0	0	0	2	4	福岡市教委	1978	121
→				1 4						1	5	福岡市教委		122
					0	1	0	0	0	1	1	横山邦継	1984	120
→				6							6	工事中		123
				1	0	0	0	0	0	0	2	飛高憲雄	1978	124
					0	0	6	0	0	6	6	山崎純男	1972	123
→				10							10	山崎純男	1972	123
					0	0	5	0	0	5	17	飛高憲雄	1979	125
	3 2		6 3		0	62	117	3	6	188	348	折尾学他	1969	126
					0	0	1	0	0	1	1	舟山良一	1984	127
				5	8	0	4	0	0	12	23	浜田信也	1968	128
				11 16	0	0	0	0	0	11	27	佐田茂	1976	129
	1				0	0	0	0	0	0	1	山本信夫		130
			1		0	0	0	0	1	1	1	平ノ内幸治	1986	131
			2		0	0	0	0	2	2	2	上野精志	1973	132
				1 14	0	2	5	0	0	8	28	石山勲	1972	133
→				33							33	折尾学	1976	62
	1				0	4	1	1	0	6	7	三島格	1972	134
					0	8	4	0	0	12	16	三島格	1972	134
					0	0	3	0	0	3	3	古谷清	1898	135 136
	1				0	0	0	1	0	1	1	中間研志	1974	137
					0	0	0	0	0	0	1	藤田等	1975	138
					0	0	2	0	0	2	2		1959	139
					0	0	3	0	0	3	3	中山平次郎	1933	140
					0	0	3	0	0	3	3		1959	139
				4	0	0	0	0	0	0	4		1949	139
					0	0	4	0	0	4	4		1950	139
														139

遺跡番号	遺跡名	所在地	I 期			II 期				III 期			
			刻突	板付I	伯玄社	金海	城ノ越	汲田		須玖		立岩古	
129	立岩堀田	飯塚市立岩								3		13	9
130	測候所	飯塚市大字川島								←	→	1	
131	甘木山	飯塚市大字川島									1		1
132	下伊川	飯塚市二瀬町										1	
133	天神森	嘉穂郡穂波町大字椿							1				
134	日上	嘉穂郡穂波町大字椿					←						
135	スダレ'75	嘉穂郡穂波町大字椿							13		2		
	'82							1					
136	森原	嘉穂郡穂波町大字森原					1						
137	土師・9地点	嘉穂郡穂波町大字土師					←						
	15地点												
	影塚東								3				
	十三塚									←	→	←	→
	影塚南												
138	原田	嘉穂郡穂波町大字馬見								←	→	←	→
139	剣塚	筑紫野市大字剣塚			17								
140	塔の原	筑紫野市塔の原			10								
141	道場山1地点	筑紫野市武蔵										27	2
	2地点				10								
142	八隈2地点	筑紫野市八隈											2
143	畑添2地点	筑紫野市武蔵											1
144	修理田'72	筑紫野市大字二日市						←	→	←	→		
	'83					3	1	6	13	3	1		
145	通り浦	筑紫野市大字紫			3								
146	山家3地点	筑紫野市大字山家						11	14				
147	吹田	朝倉郡夜須町吹田								18	13	2	
147	吹田古墳群	朝倉郡夜須町吹田					2						
148	東小田峯	朝倉郡夜須町東小田								10	2	6	4
149	東小田七坂F区	朝倉郡夜須町東小田							2				
150	鬼隈	朝倉郡夜須町大字四三島			←	→	6	7	3				
151	大木A地点	朝倉郡夜須町大字篠隈					←	→					

Ⅳ期			Ⅴ期	時期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	大形棺計	総計	調査者	調査年	文献番号
立岩新	桜馬場	三津	日佐原	不明										
	2 12	3			0	0	16	2	0	18	42	岡崎敬	1963	139
	←		→	1			1			1	2	児嶋隆人	1961	139
					0	0	0	0	0	0	2	嘉穂高校	1965	139
					0	0	1	0	0	1	1	児嶋隆人	1957	141
					0	0	0	0	0	0	1	嘉穂高校	1967	142
→				1							1	酒井仁夫	1971	143
					0	0	0	0	0	0	15	橋口達也	1975	139
					0	1	0	0	0	1	1	栗山和彦	1982	142
					0	1	0	0	0	1	1	高島忠平		140
→				2							2	長谷川清之	1984	144
				1	0	0	0	0	0	0	1	長谷川清之	1982	145
					0	0	0	0	0	0	3	長谷川清之	1982	146
				190							190	長谷川清之	1981	147
	1				0	0	0	0	0	0	1	長谷川清之	1983	148
				1 12					1	1	13	福島日出海	1986	149
					17	0	0	0	0	17	17	柳田康雄	1973	150
					10	0	0	0	0	10	10	酒井仁夫	1973	151
29 12	11 15			6	0	0	27	40	0	67	102	福岡県教委	1973	152
					10	0	0	0	0	10	10	福岡県教委	1973	152
					0	0	0	0	0	0	2	酒井仁夫	1973	153
					0	0	0	0	0	0	1	川述昭人	1974	154
				25 27	0			0	0	25	52	浜田信也	1972	155
				2 1	0	9	3	0	0	14	30	奥村俊久	1973	156
					3	0	0	0	0	3	3	佐藤保雄	1973	157
				1	0	11	0	0	0	11	26	奥村俊久	1985	158
					0	0	20	0	0	20	33		1960	159
					0	0	0	0	0	0	2	森田勉	1980	160
	1			4 2	0	0	16	1	0	21	29	柳田康雄	1984	161
					0	0	0	0	0	0	2	柳田康雄	1983	161
				1 20		7				8	37	別府大学	1971	162
→				30 74						30	104	福岡県教委	1983	163

遺跡番号	遺跡名	所在地	I 期			II 期				III 期			
			刻突	板付I	伯玄社	金海	城ノ越		汲田		須玖		立岩古
152	タコシ	朝倉郡夜須町タコシ					←						
153	琴の宮	朝倉郡夜須町琴の宮		←									
154	八並	朝倉郡夜須町八並											
155	栗田A地区	朝倉郡三輪町大字栗田											
	B地区										↔		↔
156	鬼の枕古墳	甘木市大字菩提寺										2	1
157	堤宗原	朝倉郡立石町大字堤					1	2					
158	三奈木久保鳥	甘木市大字三奈					1						
159	大庭久保	朝倉郡朝倉町大字大庭											
160	大庭上原	朝倉郡朝倉町大字大庭						2					
161	石成	朝倉郡朝倉町石成										13	
162	南出口	甘木市大字小田					1						
163	小田正信	甘木市大字小田											
164	小隈出口	甘木市大字小隈											
165	小田新道	甘木市大字小田							1				
166	小田集落	甘木市大字小田					←						
167	栗山'25	甘木市大字平塚										5	
	'62											5	
	'64											11	
	'81						2		13	5	7	4	1
168	高樋・小坂	三井郡太刀洗町大字高樋											1
169	馬田上原	甘木市大字馬田上原			2								
170	上川原	甘木市大字馬田										36	30
171	干潟'82	小郡市干潟					1		21	3	1	6	
172	干潟下屋敷	小郡市干潟					2	1	2	4	4	1	8	2
173	井上北内原	小郡市井上										11	5
174	永岡'72	筑紫野市大字永岡							11	3	3	7	
	'80								99				
175	常松	筑紫野市大字常松								2			11
176	矢倉	筑紫野市大字筑紫					1		1	1			
177	天神1地点	筑紫野市大字隈							5	14			
178	隈・西小田	筑紫野市大字隈											

Ⅳ期			Ⅴ期	時期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	大形棺計	総計	調査者	調査年	文献番号
立岩新	桜馬場	三津	日佐原	不明										
→				7							7	夜須町教委	1984	164
→				114							114	夜須町教委	1984	164
	1				0	0	0	1	0	1	1	夜須町教委	1985	
				18	0	0	0	0	0	0	18	馬田弘稔	1951	165
				55							55	高山彰	1973	166
					0	0	2	0	0	2	3	石山勲	1984	167
					0	1	0	0	0	1	3	朝倉高校	1954	168
					0	1	0	0	0	1	1	甘木市教委	1980	168
				120	0	0	0	0	0	0	120	福岡県教委	1983	169
					0	0	0	0	0	0	2		1961	159
					0	0	13	0	0	13	13		1961	159
					0	1	0	0	0	1	1			159
			1		0	0	0	0	1	1	1	小田和利	1985	170
			2		0	0	0	0	2	2	2	小田和利	1985	170
					0	1	0	0	0	1	1		1975	170
→				1							1	甘木市教委		171
14					0	0	5	14	0	19	19	中山平次郎	1925	172
				3	0	0	5	0	0	5	8	朝倉高校	1962	159
	←2	→	→	21	0	0	11	2		13	34	朝倉高校	1964	159
7	1 3				0	15	11	8	0	34	43	橋口達也	1981	173
					0	0	0	0	0	0	1	石山勲	1984	174
					2	0	0	0	0	2	2	朝倉高校	1958	159
	1 3			3 8	0	0	36	1	0	40	81	柳田康雄	1980	175
					0	22	1	0	0	23	32	片岡宏二	1982	176
	3			2	0	4	12	3	0	19	29	速水信也	1986	177
14	8 1				0	0	11	22	0	33	39	速水信也	1982	178
				11 18	0	11	3	0	0	25	53	福岡県教委	1972	155
					0	99	0	0	0	99	99	浜田信也	1980	179
					0	0	0	0	0	0	13	山崎純男	1969	180
					0	2	0	0	0	2	3	山野洋一	1975	181
					0	5	0	0	0	5	19	柳田康雄	1982	182
				1,420	0	0	0	0	0	0	1,420	筑紫野市教委	1983	169

遺跡番号	遺跡名	所在地	I 期			II 期						III 期			
			刻突	板付I	伯玄社	金海		城ノ越		汲田		須玖		立岩古	
179	津古内畑 I 次	小郡市津古				1		3	7						
	3 次					1			3						
	4 次				1										
180	三国の鼻	小郡市横隈	←	10	11 →										
181	横隈狐塚 II	小郡市横隈			7							4		23	10
182	横隈山	小郡市横隈							1	1					
183	北牟田	小郡市三沢				2	2	10	3	8	4	1			
184	大板井	小郡市大板井								2	22				
185	小郡'67	小郡市向築地				1									
186	平原 3 地点	筑紫野市大字隈											1		
	5 地点													3	
187	池の上 5 地点西	筑紫野市大字隈								1		4	3	29	7
188	津古・東宮原	小郡市津古						3	1	6	1				
189	ハサコの宮 I 次	小郡市三沢				1			1						
	2・3 次						1	11	2	7	3				
190	三沢蓬ケ浦	小郡市三沢													
191	栗原'71	小郡市三沢				1									
192	正原	小郡市三沢						5		1					
193	西島 A 区	小郡市三沢						←							
194	梅坂古墳群	鳥栖市柚比町													
195	柚比梅坂	鳥栖市柚比町													
196	梅坂炭化米	鳥栖市今町						3							
197	大久保	鳥栖市柚比町				1		5		1	6	1		3	
198	フケ A	鳥栖市田代本町				↔					↔				
	B					↔					↔				
	フケ	鳥栖市田代本町				←									
	C											↔			
199	田代天満宮東方	鳥栖市田代本町				←									
200	東田	鳥栖市田代本町									4				
201	日岸田	鳥栖市神辺町						←							

Ⅳ期						Ⅴ期	時期		Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	大形棺計	総計	調査者	調査年	文献番号
立岩新		桜馬場		三津		曰佐原	不明											
									0	4	0	0	0	4	11	西谷正	1969	183
									0	1	0	0	0	1	4	柳田康雄	1971	184
									1	0	0	0	0	1	1	宮小路賀宏	1972	185
								5	21					21	26	片岡宏二	1984	186
33	25	20	69	6		2			7	0	27	59	2	95	199	速水信也	1984	187
									0	1	0	0	0	1	2	浜田信也	1974	188
							3		0	20	1	0	0	21	33	橋口達也	1972	189
								6	0	2	0	0	0	2	30	片岡宏二	1981	190
									0	1	0	0	0	1	1	工楽善通	1967	191
									0	0	0	0	0	0	1	柳田康雄	1982	182
			2	2	1				0	0	3	2	0	5	8	柳田康雄	1982	182
		3	7	2	2		2	5	0	1	33	5	0	41	65	柳田康雄	1982	182
							1		0	9	0	0	0	10	12	片岡宏二	1982	192
									0	1	0	0	0	1	2	西谷正	1971	193
									0	18	0	0	0	18	24	橋口達也	1972	189
							1	2	0	0	0	0	0	1	3	片岡宏二		194
									0	1	0	0	0	1	1	山本信夫	1971	195
									6	0	0	0	0	6	6	前川威洋	1971	189
→								15							15	山本信夫		196
								194	8	0	0	0	0	0	8	鳥栖市教委	1983	197
								127	0	0	0	0	0	0	127	鳥栖市教委	1982	197
									0	3	0	0	0	3	3	鳥栖市教委	1978	198
								15	0	7	4	0	0	11	32	藤瀬禎博	1977	199
								8							8	石橋新次	1980	200
								5							5	鳥栖市教委	1980	200
→		→		→				39							39	鳥栖市教委	1980	197
								34							34	鳥栖市教委	1980	200
→							81	14						81	95	木下之治	1973	201
									0	0	0	0	0	0	4	坂井健二	1984	202
→								7							7	坂井健二	1983	203

遺跡番号	遺跡名	所在地	I 期			II 期						III 期			
			刻突	板付I	伯玄社	金海		城ノ越		汲田		須玖		立岩古	
202	荻野	鳥栖市柚比町							4						
203	安永田'79	鳥栖市柚比町						3		7	6			5	1
	1次										1				
	287区					7		4		26	8			6	
	282区								2	1	1		1		
	268区														
	457-1区							←							
	3年次					4	3		4	7	19	8		8	3
	'81							1	8	4	4	11	8		
204	荻野公民館	鳥栖市柚比町								2	2	1	3		
205	村田・三本松	鳥栖市村田町	7		3	6		2	3	2	1	4	2		1
206	香田	三養基郡中原町大字蓑原	1												
207	姫方	三養基郡中原町大字蓑原						66	4			66	64	8	4
208	姫方原B、C	三養基郡中原町大字蓑原						←5			6				
209	原古賀 どんどん落	三養基郡中原町大字原													
210	宝満谷	三養基郡北茂安町 大字中津隈				←							→		
211	船石南	三養基郡上峰村大字堤				←									
212	四本谷	三養基郡上峰村大字堤									1	1			
213	船石	三養基郡上峰村大字堤								11	5	2	1	1	
214	二塚山	神埼郡東脊振村大曲他				2				41	14	25	5	35	3
215	五本谷	三養基郡上峰村大字堤						2	6	25	2	1		1	
216	松葉	神埼郡東脊振村大曲				10	5								
217	山古賀	神埼郡東脊振村大字石動			2										
218	志波屋 六本松乙	神埼郡神埼町志波屋													
219	的	神埼郡神埼町大字的						←							
220	西石動	神埼郡東脊振村大字石動			2	←2				1	→				
	A				2	2				1	4				
221	松原	神埼郡東脊振村横田													
222	三津永田	神埼郡東脊振村三津永田				1								1	
223	タヶ里	神埼郡東脊振村三津						1	2						

Ⅳ期			Ⅴ期	時期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	大形棺計	総計	調査者	調査年	文献番号
立岩新	桜馬場	三津	曰佐原	不明										
					0	0	0	0	0	0	4	坂井健二	1983	203
	7	2			0	10	5	7	0	22	31	藤瀬禎博	1979	204
					0	0	0	0	0	0	1	藤瀬禎博	1980	205
	29				0	37	6	29	0	72	80	藤瀬禎博	1979	206
				6	0	1	0	0	0	1	11	藤瀬禎博	1979	206
				7 10	0	0	0	0	0	7	17	鳥栖市教委	1979	206
→				14 21						14	35	藤瀬禎博	1981	207
	13 16				0	11	16	13	0	40	85	藤瀬禎博	1979	206
					0	5	11	0	0	16	36	鳥栖市教委	1981	197
					0	2	1	0	0	3	8	鳥栖市教委	1983	197
					10	10	4	0	0	24	31	藤瀬禎博	1981	208
					1	0	0	0	0	1	1	久保和彦	1979	209
	1 2				0	66	74	1	0	141	215	佐賀県教委	1972	210
		2 →		13		5				5	26	田平徳栄	1978	211
				35	0	0	0	0	0	0	35	松尾禎作	?	212
				27 28						27	55	東中川忠美	1979	213
→	→			666							666	原田大介	1985	214
					0	0	1	0	0	1	2	佐賀県教委	1985	215
					0	11	3	0	0	14	20	七田忠昭	1982	216
	14 2	5 1		1 7	0	43	60	19	0	123	155	七田忠昭	1975	215
	2			1	0	27	2	2	0	31	40	佐賀県教委	1978	215
					0	10	0	0	0	10	15	佐賀県教委	1974	215
					2	0	0	0	0	2	2	田平徳栄	1982	217
				85	0	0	0	0	0	0	85	坂井健二	1982	218
→				1							1	坂井健二他	1982	218
				4	2	3	0	0	0	5	9	立石泰久	1980	219
				4	2	3	0	0	0	5	13	久保伸洋	1986	218
				100	0	0	0	0	0	0	100		1967	220
		5 2		11	0	1	1	5	0	7	20	多伊良寿一	1952	221
					0	1	0	0	0	1	3	久保伸洋	1981	222

遺跡番号	遺跡名	所在地	I期			II期						III期			
			刻突	板付I	伯玄社	金海		城ノ越		汲田		須玖		立岩古	
224	西前田B	神埼郡東脊振村大字西前田													
225	松葉石棺	神埼郡東脊振村大曲													
226	切通	三養基郡上峰村大字切通								←		→			
227	松ノ内A	神埼郡東脊振村大字松ノ内													
228	瀬の尾	神埼郡東脊振村瀬の尾													
229	志波屋四ノ坪	神埼郡神埼町志波屋			2	←									
	三ノ坪乙														
	吉野ケ里I区	神埼郡神埼町吉野ケ里				←						→			
	II・IV区									←		→			
	志波屋三ノ坪甲	神埼郡神埼町志波屋						←				→			
230	馬郡	神埼郡神埼町大字鶴								←		→			
231	下中杖	神埼郡三田川町大字豆田												2	3
232	詫田西分貝塚	神埼郡千代田町大字詫田			←							→			
233	柴尾	神埼郡千代田町大字用作						←							
234	利田柳III区	神埼郡神埼町大字竹			1	4		3	5	2	2	15	12	1	
235	野田	神埼郡神埼町大字竹										4	2		
236	尾崎利田	神埼郡神埼町尾崎													
237	四本黒木I次	神埼郡神埼町大字城原			2	11		4		1	27			1	6
	II次				2	11		2	2		1	22	9	1	
238	朝日北'82	神埼郡神埼町大字城原													73
	II区							←							
	IV区														78
	V区														41
239	久保泉丸山	佐賀市久保泉町川久保	4												
240	金立開拓	佐賀市金立町大字金立						32							
241	六本黒木	佐賀市金立町大字金立								11	6				
242	五本黒木	佐賀市金立町大字金立				5									
243	三本黒木	佐賀市金立町三本黒木					3								
244	黒土原	佐賀市金立町大字金立			7										
245	大門	佐賀市金立町大門				←									

Ⅳ期			Ⅴ期	時期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	大形棺計	総計	調査者	調査年	文献番号
立岩新	桜馬場	三津	曰佐原	不明										
				140	0	0	0	0	0	0	140	久保伸洋		223
	1				0	0	0	1	0	1	1	佐賀県教委	1959	224
				89							89	金関丈夫	1956	225
				20	0	0	0	0	0	0	20	久保伸洋		226
				80	0	0	0	0	0	0	80	久保伸洋		
				525	2					2	527	佐賀県教委	1980	
				33							33	佐賀県教委	1980	
				136							136	佐賀県教委	1980	
				253							253	佐賀県教委	1980	
				42							42	佐賀県教委	1980	
				72							72	八尋実	1980	227
	←4		→	2 10	0	0	2	4		8	21	七田忠昭	1977	228
				16 26						16	42	森田孝志	1983	
→				1							1	堤 安信	1986	229
					1	9	16	0	0	26	45	岩永政博	1979	230
				3	0	0	4	0	0	4	9	佐賀県教委	1982	231
			2		0	0	0	0	2	2	2	天本洋一	1978	232
				3	2	16	1	0	0	19	55	河原忠司	1976	233
				6	2	13	23	0	0	38	56	八尋実	1979	234
					0	0	0	0	0	0	73	坂井健二	1982	218
→				3							3			
					0	0	0	0	0	0	78	坂井健二	1983	203
					0	0	0	0	0	0	41	坂井健二	1983	203
					4	0	0	0	0	4	4	東中川忠美	1977	235
	1				0	32	0	1	0	33	33	木下之治	1973	236
			3 1		0	11	0	0	3	14	21	西田和己	1977	237
					0	5	0	0	0	5	5			238
					0	0	0	0	0	0	3	佐賀県教委	1979	239
					7	0	0	0	0	7	7	福田義彦	1985	240
→												木下之治	1972	241

遺跡番号	遺跡名	所在地	I 期			II 期				III 期	
			刻実	板付I	伯玄社	金海	城ノ越	汲田		須玖	立岩古
246	東千布	佐賀市東千布		←							
247	礫石A	佐賀郡大和町大字久地井	←		→						
	B		←		→						
248	惣座	佐賀郡大和町大字久地井									
249	久地井C	佐賀郡大和町大字久地井									
250	西山田 二本松B	佐賀郡大和町大字川上									
251	東山田一本杉 II・III区	佐賀郡大和町大字東山田									
	I区					←					
252	久留間 カミ塚B	佐賀郡大和町大字久留間					←				
253	池上	佐賀郡大和町大字池上				←		→			
254	佐織	小城郡三日月町	1								
255	袴田	小城郡三日月町袴田							1		
256	戊B	小城郡三日月町							5		
257	自在	小城郡小城町自在				←					
258	本告A地点	小城郡三日月町		17	18	14	7	9			
	B地点					4					
	C地点					5					
259	布施ケ里	小城郡小城町布施ケ里									
260	久米B	小城郡三日月町									
261	下久米	小城郡三日月町				14		17	17		3
262	寺浦瓦窯跡	小城郡小城町大字畑田	2								
263	宿	小城郡小城町大字宿									
264	晴田小学校校庭	小城郡小城町大字晴木									
265	深底	小城郡小城町大字池上									
266	出口A	多久市東多久町大字別府									
267	原田	多久市東多久町									
268	牟田辺1次	多久市南多久町牟田辺						34	13	91 43	
	2次								2		
	3次							6	21		16
269	撰分	多久市多久町						2		2	3

Ⅳ期			Ⅴ期	時期		Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	大形棺計	総計	調査者	調査年	文献番号
立岩新	桜馬場	三津	日佐原	不明											
→				24	18						24	42	福田義彦	1983	242
						16					16	16	田平徳栄	1981	243
	←	→			2	7					7	9	田平徳栄	1981	243
					28	0	0	0	0	0	0	28	田平徳栄	1983	244
					1	0	0	0	0	0	0	1	田平徳栄	1982	218
	1					0	0	0	1	0	1	1	天本洋一	1986	245
	←	→			6	0	0	0	0	0	0	6	田平徳栄	1984	202
→	→			35	78						35	113	田平徳栄	1983	203
→				10	5						10	15	高瀬哲郎	1981	246
												9		1980	
						1	0	0	0	0	1	1			247
						0	0	0	0	0	0	1	七田忠昭	1979	248
						0	0	0	0	0	0	5	木下巧他	1975	249
→	→				28							28	小城町教委	1984	250
	4					35	30	0	4	0	69	69	天本洋一	1980	251
						0	4	0	0	0	4	4	天本洋一	1980	251
						0	5	0	0	0	5	5	天本洋一	1980	251
					20	0	0	0	0	0	0	20	小城町教委	1984	250
	←	→			1							1	佐賀県教委	1977	252
						0	31	3	0	0	34	51	佐賀県教委	1977	252
						2	0	0	0	0	2	2	一ノ瀬憲昭	1984	202
	5					0	0	0	5	0	5	5	木下巧		253
					100	0	0	0	0	0	0	100	木下巧		253
					10	0	0	0	0	0	0	10	木下巧		253
					1	0	0	0	0	0	0	1	西村隆司	1982	254
	2					0	0	0	2	0	2	2	西村隆司	1982	243
				9	25	0	34	91	0	0	134	215	木下之治	1974	255
						0	0	0	0	0	0	2	天本洋一	1976	256
						0	6	0	0	0	6	43	西村隆司	1977	257
		2				0	2	0	0	0	2	9	西村隆司	1981	258

遺跡番号	遺跡名	所在地	I 期			II 期			III 期	
			剣突	板付I	伯玄社	金海	城ノ越	汲田	須玖	立岩古
270	東宮裾	杵島郡北方町東宮裾								
271	椛島山	杵島郡北方町椛島山						2 1		
272	小野原I区	武雄市橘町大字大日								
273	茂手	武雄市橘町大字大日								
274	みやこ	武雄市橘町大字大日								9
275	郷ノ木B地点	武雄市橘町大字大日		3						
276	納手	武雄市橘町大字大日								
277	小楠	武雄市武尾町								
278	富の原A	大村市富の原								
	B							1	2	7 4
279	帆崎	北高来郡小長井町新田原帆崎						1		
280	諫早農業高校	諫早市立石町								
281	小栗A	諫早市小川町							1 1	1
	B							2		
282	林の辻	諫早市小川町								1
283	西の角	北高来郡森山町上井牟田								3
284	妙法塚B	南高来郡有明町湯江甲						1		
285	大野原A	南高来郡有明町大三東					←			
286	一部	南高来郡有明町大三東					←			
287	景華園	島原市三会景華園							3	
288	原山支石墓群	南高来郡北有馬町	2							
			1							
289	今福B	南高来郡北有馬町今福名								
	C									
290	畑中	宇土市松山町						1	1	
291	境目西原	宇土市境目西原								1
292	宇土城跡（城山）	宇土市古城町								
293	上ノ山	下益城郡城南町大字隈庄							1	1
294	今村原	熊本市池田							←	
295	上の原'78	下益城郡城南町塚原					2			
	'80									1

Ⅳ期			Ⅴ期	時期	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	大形棺	総	調査者	調査年	文献番号
立岩新	桜馬場	三津	曰佐原	不明	期	期	期	期	期	計	計			
				1	0	0	0	0	0	0	1	田平徳栄	1984	202 259
					0	2	0	0	0	2	3	志佐惲彦	1975	260
	1				0	0	0	1	0	1	1	原田保則	1986	261
		2 1			0	0	0	2	0	2	3	原田保則	1979	262
	5				0	0	0	5	0	5	14	原田保則		
					3	0	0	0	0	3	3	原田保則	1983	263
	1				0	0	0	1	0	1	1	原田保則	1979	262
←→												武雄市教委		259
	3 7				0	0	0	3	0	3	10	稲富裕和	1980	264
	4 2				0	1	7	4	0	12	20	稲富裕和	1982	264
					0	1	0	0	0	1	1	田川肇	1978	265
					0	0	0	0	0	0	0	工事中	1906	266
					0	0	2	0	0	2	3	秀島康秀	1972	267
					0	0	0	0	0	0	2	正林護	1972	267
					0	0	0	0	0	0	1	秀島康秀	1982	268
	1	1	1		0	0	0	2	1	3	6	田川肇	1983	269
					0	0	0	0	0	0	1	正林護他	1975	270
			→	7							7	古田正隆	1984	271 272
→	←		→	2							2	副島和明	1977	273
					0	0	3	0	0	3	3	工事中	1958	274
					2	0	0	0	0	2	2	森貞次郎他	1960	275 276
					1	0	0	0	0	1	1	正林護他	1979	277
	1	1 1			0	0	0	2	0	2	3	宮崎貴夫	1978	278
	←1		→	5				1		1	6	宮崎貴夫	1980	279
					0	1	1	0	0	2	2	北条暉幸	1979	280
					0	0	1	0	0	1	1	?	?	281
					0	0	0	0	0	0	0	工事中	1963	281 282
					0	0	1	0	0	1	2		?	281
→												?	?	281
					0	0	0	0	0	0	2	野田拓治他	1978	281
					0	0	1	0	0	1	1	村井真輝	1980	281

遺跡番号	遺跡名	所在地	I 期			II 期			III 期	
			刻突	板付I	伯玄社	金海	城ノ越	汲田	須玖	立岩古
296	沈目立山	下益城郡城南町大字沈目			13	3				
297	久保	上益城郡御船町							1	
298	旧協和醗酵工場内	熊本市出水町								1
299	神水	熊本市出水町							9 11	
300	北原	熊本市大江町渡鹿							1	
301	北久根山	熊本市北久根山							4	
302	小松山	熊本市大江町渡鹿							1	
303	原下段	熊本市大江町渡鹿							←	—
304	下南部	熊本市下南部								1
305	葉山F	熊本市葉山							2 2	
306	小山山伏塚	熊本市小山町							←2	—
307	中山	熊本市小山町						1		
308	坪井古屋敷	熊本市黒髪町							1	
309	黒髪	熊本市黒髪町								1
310	松崎	熊本市松崎							1	
311	八景水谷	熊本市八景								1
312	迫ノ上	熊本市竜田町							1	
313	楡ノ木	熊本市竜田町								1
314	竹ノ後	熊本市竹ノ後								1
315	牟田原	菊池郡大津町矢護川			16					
316	梅の木	菊池郡菊陽町大字津久礼						3		7
317	西矢護免	菊池郡大津町			2			2		2
318	藤尾支石墓群	菊池郡旭志村大字弁利								
319	矢護川日向	菊池郡大津町矢護川							1	1 1
320	新屋敷	菊池郡泗水町南住吉		←→						
321	藤巻	菊池郡泗水町						1		
322	庄荒子	鹿本郡鹿本町					1			
323	七城町	菊池郡七城町								1
324	方保田塚ノ本	山鹿市方保田								
325	中尾・下原	山鹿市蒲生					1			
326	御宇田	鹿本郡鹿本町						2		

Ⅳ期			Ⅴ期	時期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	大形棺計	総計	調査者	調査年	文献番号
立岩新	桜馬場	三津	曰佐原	不明										
					13	0	0	0	0	13	16	緒方勉	1975	283
					0	0	1	0	0	1	1	田中義和	1973	284
					0	0	1	0	0	1	1			285
	←	→	→	17	0	0	9			9	37	平岡勝昭	1954	286
1					0	0	1	0	0	1	2	乙益重隆	1954	285
					0	0	4	0	0	4	4	伊藤奎二	1973	288
					0	0	1	0	0	1	1	?	1951	285
→				4							4	河野建夫	1961	285
					0	0	1	0	0	1	1		1971	285
					0	0	2	0	0	2	4	熊本市教委	1974	289
→				1			2			2	3	伊藤奎二	1964	285
					0	1	0	0	0	1	1	松野茂	1965	285
					0	0	1	0	0	1	1			290
					0	0	0	0	0	0	1		1936	
					0	0	1	0	0	1	1			291
					0	0	1	0	0	1	1			290
					0	0	1	0	0	1	1	熊本市博	1960	290
					0	0	1	0	0	1	1	桑原憲彰	1966	289
					0	0	1	0	0	1	1	乙益重隆	1957	290
					16	0	0	0	0	16	16	坂本経堯		292
					0	0	7	0	0	7	10	平岡勝昭	1982	293
					2	2	2	0	0	6	6	原口長之	1979	294
				2	0	0	0	0	0	0	2	坂本経堯	1958	295
					0	0	2	0	0	2	3	佐藤伸二	1979	296
														297
					0	0	0	0	0	0	1			294
					0	0	0	0	0	0	1			298
					0	0	0	0	0	0	1			288
	2				0	0	0	0	0	0	2			299
					0	1	0	0	0	1	1	隈昭志	1976	300 301
					0	0	0	0	0	0	2			298

遺跡番号	遺跡名	所在地	I 期			II 期						III 期		
			刻突	板付 I	伯玄社	金海		城ノ越		汲田		須玖		立岩古
327	笠仏	山鹿市笠仏									2			
328	小原竜宮	山鹿市小原竜宮								1				
329	古閑	玉名郡菊水町高野							1					
330	塔の本	鹿本郡植木町轟						1						
331	年の神	玉名郡岱明町								1	2	2	1	
332	杉谷	荒尾市一部										2	1	
333	金山宮内	荒尾市金山宮内										3		
334	羽山台C	大牟田市大字草木						3						
	E									6	4		1	
335	倉永	大牟田市大字倉永							1					
336	堤	山門郡瀬高町大字山門								2				
337	藤の尾垣添	山門郡瀬高町大字山門						5	15	7		1	1	
338	権現塚北	山門郡瀬高町坂田			9	19	5	6	1		1		1	
339	亀の甲	八女市室岡										6		
340	曲松	八女郡立花町大字北山												
341	室岡山ノ上	八女市室岡						←						
342	六反田	八女市六反田						←						
343	蔵数東野屋敷	筑後市蔵数								4	3			
344	寺脇	久留米市荒木町下荒木												
345	白口向定覚	久留米市荒木町白口										←		→
346	東櫛原今寺	久留米市東櫛原町									1			
347	石丸	久留米市東櫛原町												
348	南薫	久留米市南薫町												
	南薫2次	久留米市南薫町								1				
	3次										1			
	4次					1					1			
349	西屋敷1次	久留米市合川町							4					
	2次													
350	市の上北屋敷	久留米市合川町			2			←		1	—	—	1	—
351	筑後国府 67-2次	久留米市合川町												
352	西小路	久留米市東合川町						←						

Ⅳ期			Ⅴ期	時期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	大形棺計	総計	調査者	調査年	文献番号
立岩新	桜馬場	三津	曰佐原	不明										
					0	0	0	0	0	0	2	鹿本高校	1966	291
					0	1	0	0	0	1	1	隈昭志	1966	302
					0	0	0	0	0	0	1	高木正文		
					0	1	0	0	0	1	1	玉名女子高	1971	303
					0	1	2	0	0	3	6			304
					0	0	2	0	0	2	3	松村道博	1977	305
					0	0	3	0	0	3	3	工事中	1968	306
				31	0	3	0	0	0	3	34	宮小路賀宏	1974	307
					0	6	0	0	0	6	11	平島勇夫他	1980	308
					0	0	0	0	0	0	1	黒田康夫	1958	309
					0	2	0	0	0	2	2	川述昭人他	1981	310
					0	12	1	0	0	13	29	川述昭人	1986	311
1				3 3	9	25	0	1	0	38	49	川述昭人	1983	312
			1	7	0	0	6	0	1	7	14	小田富士雄	1962	313
	3		21 1		0	0	0	3	21	24	25	栗原和彦	1983	314
→				1							1	赤崎敏男	1984	315
→				122							122	八女市教委	1983	169
					0	4	0	0	0	4	7	川述昭人	1985	316
				9	0	0	0	0	0	0	9	九州大学	1961	317
					0	0	10	0	0	10	16	鏡山猛	1951	318
					0	0	0	0	0	0	1	久留米市教委	1976	317
				5	0	0	0	0	0	0	5	水野清一	1927	319
	↔		↔	9							9	波多野晥三	1953	318
					0	1	0	0	0	1	2	久留米市教委	1974	317
					0	0	0	0	0	0	1	久留米市教委	1976	317
					0	1	0	0	0	1	2	久留米市教委	1982	317
					0	0	0	0	0	0	4	松村一良	1982	322
		1		24				1		1	25	大石昇	1983	323
→				6	2	1	0	0	0	3	10	久留米市教委	1977	324
			1		0	0	0	0	1	1	1	松村一良	1986	325
→				1						1	1	真子俊明	1968	317

遺跡番号	遺跡名	所在地	I 期			II 期			III 期			
			刻突	板付 I	伯玄社	金海	城ノ越	汲田	須玖		立岩古	
353	安国寺'78	久留米市山川町神代						2	5	8	4	9
	'81											
	'82											1
354	ヘボノ木	久留米市ヘボノキ										62
355	大銃場	久留米市御井町										
356	祇園山	久留米市御井町高良山										
357	吹上'79	日田市大字渡里					1					
	'80									1		
	'86											
358	草場 2	日田市清岸寺町本村										
359	白寿	日置郡吹上町中ノ里							1			
360	下小路	日置郡金峰町							1			
361	阿多貝塚	日置郡金峰町									1	

Ⅳ期			Ⅴ期	時期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	大形棺計	総計	調査者	調査年	文献番号
立岩新	桜馬場	三津	日佐原	不明										
	1			4 4	0	2	9	1	0	16	37	萩原裕房	1978	317
	←		→	60							60	富永直樹	1981	328
					0	0	0	0	0	0	1	久留米市教委	1982	317
					0	0	0	0	0	0	62	久留米市教委	1983	326
		4			0	0	0	0	0	0	4	不明		317
			3		0	0	0	0	3	3	3	福岡県教委	1969	327
					0	0	0	0	0	0	1	後藤宗俊	1979	331
		2			0	0	0	2	0	2	3	後藤宗俊	1980	332
		1	1		0	0	0	1	0	1	2	後藤宗俊	1986	333
			3 10		0	0	0	0	3	3	13	大分県教委		329
					0	0	1	0	0	1	1	池畑耕一	1971	334
					0	0	1	0	0	1	1			335
					0	0	1	0	0	1	1	戸崎勝洋	1978	336

文献目録

1 小田富士雄「五島列島の弥生文化」(『長崎大学人類学考古学研究報告』2，1970)。
2 塚原　博編『神ノ崎遺跡』小値賀町文化財調査報告書4，1984。
3 藤田和裕編『長崎県埋蔵文化財調査集報』Ⅲ，長崎県文化財調査報告書50，1980。
4 分部哲秋「長崎県宇久松原遺跡出土の弥生時代幼小児骨」(『長崎県埋蔵文化財調査集報』Ⅵ　長崎県文化財調査報告書66，1983。
5 宮崎貴夫編『長崎県埋蔵文化財調査集報』Ⅵ，長崎県文化財調査報告書66，1983。
6 萩原博文編『津吉遺跡群発掘調査報告書』平戸市教育委員会，1986。
7 久村貞男編『宮の本遺跡』佐世保市埋蔵文化財調査報告書　昭和55年度，1980。
8 大野台遺跡調査団「大野台遺跡」(『古文化談叢』1，1974)。
9 樋口隆康「平戸の先史文化」(『平戸学術調査報告』，1951)。
10 藤田和裕編『原の辻遺跡』Ⅱ，長崎県文化財調査報告書31，1977。
11 安楽　勉編『原の辻遺跡』Ⅲ，長崎県文化財調査報告書37，1978。
12 船井向洋編『西尾遺跡A地点』伊万里市文化財調査報告書23，1988。
13 森田孝志編『押川遺跡』佐賀県文化財調査報告書60，1981。
14 松尾吉高編『波戸遺跡群』鎮西町文化財調査報告書1，1983。
15 藤田等他編『大友遺跡』呼子町文化財調査報告書1，呼子町郷土史研究会，1981。
16 佐賀県教委編『大友遺跡発掘調査概報』図録編，佐賀県文化財調査報告書22，1973。
17 柴元静雄「呼子町大友遺跡発掘調査概報その2，その3」(『新郷土』1970,11.1971,1)。
18 木下之治「図版解説佐賀県大友弥生遺跡」(『九州考古学』39・40，1970)。
19 徳富則久他編『佐賀県農業基盤整備事業に係わる文化財調査報告書』3，佐賀県文化財調査報告書79，1985。
20 杉原荘介「佐賀県桜馬場遺跡」(『日本農耕文化の生成』東京堂，東京，1961)。
21 中島直幸他編『菜畑遺跡』唐津市文化財調査報告書5，1982。
22 中島直幸編『巡見道遺跡』唐津市文化財調査報告書3，1982。
23 橋口達也「中原遺跡」(『末盧国』六興出版，東京，1982)。
24 田島龍太他編『中原遺跡』唐津市文化財調査報告書18，1987。
25 中島直幸編『久里大牟田遺跡』唐津市文化財調査報告書1，1980。
26 木下巧他編『柏崎遺跡群』佐賀県文化財調査報告書53，1980。
27 渡辺正気「瀬戸口支石墓」(『末盧国』六興出版，東京，1982)。
28 伊藤奎二・高倉洋彰「森田支石墓群」(『末盧国』六興出版，東京，1982)。
29 岡崎　敬「山本遺跡」(『末盧国』六興出版，東京，1982)。
30 森本六爾「肥前松浦潟地方における甕棺遺跡と其の伴出遺物」(『考古学』1―5・6，1930)。
31 蒲原宏行編『伊岐佐中原遺跡群』相知町文化財調査報告書1，1986)。
32 藤田　等「宇木汲田遺跡」(『末盧国』六興出版，東京，1982)。
33 中島直幸編『宇木汲田遺跡調査概要』唐津市文化財調査報告書21，1987。
34 田崎博之「唐津市宇木汲田遺跡1984年度発掘調査概報」(『九州文化史研究所紀要』31，1986)。
35 木下　巧編『萬麓・寺ノ下遺跡』佐賀県文化財調査報告書29，1974。
36 松尾禎作「葉山尻支石墓調査概報」(『考古学雑誌』39―1，1953)。
37 松尾禎作「葉山尻支石墓第二次調査概報」(『考古学雑誌』40―2，1954)。
38 中島直幸編『柏崎小長崎遺跡』唐津市文化財調査報告書6，1983。
39 中島直幸編『柏崎松本遺跡』唐津市文化財調査報告書2，1980。
40 唐津湾周辺遺跡調査委員会編『末盧国』―佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究―，六興出版，東京，1982。
41 渡辺正気「五反田支石墓」(『末盧国』六興出版，東京，1982)。

42　島田寅次郎他編『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』1，福岡県，1925。
43　佐々木隆彦編『竹戸遺跡』二丈町文化財調査報告1，1979。
44　中間研志他編『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会，1980。
45　馬田弘稔編『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告』Ⅱ，福岡県教育委員会，1982。
46　橋口達也編『新町遺跡』志摩町文化財調査報告書7，1987。
47　橋口達也編『新町遺跡』Ⅱ，志摩町文化財調査報告書8，1988。
48　井上裕弘編『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書3，1983。
49　橋口達也編『石崎曲り田遺跡』Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告8, 9, 10　福岡県教育委員会，1984，1985。
50　川村　博編『伏龍遺跡』前原町文化財調査報告書5，1981。
51　石井扶美子編『篠原新建遺跡』Ⅲ，前原町文化財調査報告書17，1984。
52　鏡山猛他編『志登支石墓群』埋蔵文化財発掘調査報告4，文化財保護委員会，1956。
53　川村　博編『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書8，1982。
54　岡部裕俊編『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書25，1987。
55　中山平次郎「大甕を発見せる古代遺跡(一)」(『考古学雑誌』11―1，1921)。
56　柳田康雄編『三雲遺蹟―南小路地区編―』福岡県文化財調査報告書69，1985。
57　小池史哲編『三雲遺蹟』Ⅳ，福岡県文化財調査報告書65，1983。
58　柳田康雄編『三雲遺蹟』Ⅰ，福岡県文化財調査報告書58，1980。
59　柳田康雄編『三雲遺蹟』Ⅱ，福岡県文化財調査報告書60，1981。
60　柳田康雄編『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』2，福岡県教育委員会，1971。
61　折尾　学編『今山・今宿遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書75，1981。
62　福岡市歴史資料館編『福岡平野の歴史』―緊急発掘された遺跡と遺物―，福岡市歴史資料館，1977。
63　佐藤一郎編『青木遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書169，1987。
64　柳田純孝編『野方中原遺跡調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書30，1974。
65　小林義彦編『羽根戸遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書134，1986。
66　常松幹夫他編『吉武高木遺跡―弥生時代埋葬遺跡の調査概要―』福岡市埋蔵文化財調査報告書143，1986。
67　下村　智「弥生中期の「墳丘墓」を掘る―吉武樋渡遺跡の調査―」(『特別展図録　早良国王墓とその時代―墳墓が語る激動の弥生社会―』福岡市立歴史資料館図録11，1986)。
68　加藤良彦「弥生「戦士」の墓を掘る―吉武大石遺跡の調査―」(『特別展図録　早良国王墓とその時代―墳墓が語る激動の弥生社会―』福岡市立歴史資料館図録11，1986。
69　二宮忠司他編『四箇周辺遺跡調査報告書』4，福岡市埋蔵文化財調査報告書63，1980。
70　池崎譲二他編『西新町遺跡』福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ，福岡市埋蔵文化財調査報告書79，1982。
71　福岡市教委編『埋蔵文化財遺跡地名表』福岡市埋蔵文化財調査報告書12，1971。
72　森貞次郎「有田甕棺遺跡の甕棺と銅戈」(『有田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書2，1968。
73　井沢洋一他編『福岡市有田・小田部』4，福岡市埋蔵文化財調査報告書96，1983。
74　井沢洋一他編『福岡市有田・小田部』5，福岡市埋蔵文化財調査報告書110，1984。
75　井沢洋一他編『福岡市有田・小田部』7，福岡市埋蔵文化財調査報告書139，1986。
76　井沢洋一編『福岡市有田・小田部』8，福岡市埋蔵文化財調査報告書155，1987。
77　井沢洋一他編『福岡市有田・小田部』6，福岡市埋蔵文化財調査報告書113，1985。
78　山崎純男編『下山門遺跡―付姪浜新町遺跡調査報告書―』福岡市埋蔵文化財調査報告書23，1973。
79　中山平次郎「古支那鏡鑑沿革(二)」(『考古学雑誌』9―3，1918)。
80　井沢洋一他編『藤崎遺跡Ⅳ―第8・10・11次発掘調査報告―』福岡市埋蔵文化財調査報

告書138，1986。
81　浜石哲也編『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ—藤崎遺跡—』福岡市埋蔵文化財調査報告書62，1981。
82　浜石哲也編『福岡市西区藤崎遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書80，1982。
83　井沢洋一他編『福岡市早良区藤崎遺跡Ⅲ—第7・9次発掘調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書137，1986。
84　塩屋勝利他編『福岡市城南区浄泉寺遺跡—遺構編—』福岡市埋蔵文化財調査報告書99，1983。
85　山崎純男「福岡市カルメル修道院内遺跡調査報告」(『京ノ隈遺跡』段谷地所開発株式会社，1976)。
86　高倉洋彰編『宝台遺跡』日本住宅公団，1970。
87　中原志外頭他「丸尾台遺跡報告」(『宝台遺跡』日本住宅公団，1970)。
88　井上裕弘編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』9，福岡県教育委員会，1977。
89　佐々木隆彦編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』6，福岡県教育委員会，1978。
90　井上裕弘編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』3，福岡県教育委員会，1977。
91　木下　修編『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』10，福岡県教育委員会，1979。
92　佐々木隆彦編『安徳・道善・片縄地区区画整理事業地内埋蔵文化財調査概報』那珂川町文化財調査報告書3，1979。
93　沢田康夫他編『松木遺跡』Ⅰ，那珂川町文化財調査報告書11，1984。
94　宮小路賀宏編『一の谷遺跡』春日町文化財調査報告書2，1969。
95　佐土原逸男編『大谷遺跡』春日市文化財調査報告書5，1979。
96　馬渡圭子編『西平塚遺跡・ナライ遺跡』春日市文化財調査報告書10，1981。
97　秀嶋龍男編『西平塚遺跡C地区』春日市文化財調査報告書9，1981。
98　松岡　史他『福岡県伯玄社遺跡調査概報』福岡県文化財調査報告書36，1968。
99　丸山康晴編『赤井手遺跡』春日市文化財調査報告書6，1980。
100　鏡山　猛編『福岡県須玖・岡本遺跡調査概報』福岡県文化財調査報告書29，1963。
101　中山平次郎「銅鉾銅剣発見地の遺物追加」(『考古学雑誌』8—10，1919)。
102　島田貞彦『筑前須玖史前遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告 第十一冊，1930。
103　佐々木隆彦編『須玖・岡本遺跡』福岡県文化財調査報告書55，1980。
104　丸山康晴編『須玖・岡本遺跡』春日市文化財調査報告書7，1980。
105　網干善教他編『日本考古学年報』37，日本考古学協会，東京，1986。
106　井上裕弘編『高辻遺跡発掘調査概要』春日市文化財調査報告書3，1973。
107　中山平次郎「銅剣銅鉾の新資料」(『考古学雑誌』7—7，1917)。
108　後藤　直他編『板付』福岡市埋蔵文化財調査報告書35，1976。
109　山口譲治編『板付周辺遺跡調査報告書』3，福岡市埋蔵文化財調査報告書36，1976。
110　柳沢一男編『板付周辺遺跡調査報告書』7，福岡市埋蔵文化財調査報告書65，1981。
111　横山邦継編『板付周辺遺跡調査報告書』1，福岡市埋蔵文化財調査報告書29，1974。
112　横山邦継他編『板付周辺遺跡調査報告書』2，福岡市埋蔵文化財調査報告書31，1975。
113　柳沢一男編『板付周辺遺跡調査報告書』9，福岡市埋蔵文化財調査報告書98，1983。
114　力武卓治他編『那珂深オサ遺跡』Ⅱ，福岡市埋蔵文化財調査報告書82，1982。
115　田中寿夫他編『福岡市公民館建設関係埋蔵文化財調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書162，1987。
116　横山邦継編『福岡市博多区比恵遺跡—第6次調査・遺構編—』福岡市埋蔵文化財調査報告書94，1983。
117　吉岡完祐他編『瑞穂—福岡市比恵台地遺跡—』日本住宅公団，1980。
118　柳沢一男編『比恵遺跡第8次調査概要』福岡市埋蔵文化財調査報告書116，1985。

119　池崎譲二他編『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ―博多―』高速鉄道関係調査(1)　福岡市埋蔵文化財調査報告書105，1984。
120　池崎譲二他編『博多Ⅳ』福岡市埋蔵文化財調査報告書119，1985。
121　池崎譲二他編『博多・高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ』高速鉄道関係調査(2)　福岡市埋蔵文化財調査報告書126，1986。
122　柳沢一男他編『博多Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書118，1985。
123　山崎義治他編『福岡市博多区大字下月隈宝満尾遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書26，1974。
124　力武卓治他編『福岡市博多区席田遺跡群・中尾遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書109，1984。
125　飛高憲雄編『下月隈宮ノ後遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書61，1980。
126　折尾　学編『史跡金隈遺跡―発掘調査及び遺跡整備報告書―』福岡市埋蔵文化財調査報告書123，1985。
127　舟山良一編『牛頸地区遺跡群』Ⅰ，大野城市文化財調査報告書16，1985。
128　浜田信也編『中・寺尾遺跡』大野町の文化財３，1971。
129　川述昭人編『中・寺尾遺跡』大野城市文化財調査報告書１，1977。
130　山本信夫「付編　陣の尾遺跡第２次調査報告」(『太宰府条坊跡』太宰府町の文化財５，1982)。
131　平ノ内幸治編『ウソフキ遺跡』宇美町文化財調査報告書５，1986。
132　上野精志編『七夕池遺跡群発掘調査概報』志免町文化財調査報告書１，1974。
133　石山　勲編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』30，福岡県教育委員会，1979。
134　力武卓治編『蒲田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書33，1975。
135　古谷　清「鹿部と須玖」(『考古学雑誌』２―３，1911)。
136　九大考古学研究室編『鹿部山遺跡』日本住宅公団，1973。
137　石山　勲編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』21，福岡県教育委員会，1978。
138　橋口達也編『スダレ遺跡』穂波町文化財調査報告書１，1976。
139　岡崎　敬編『立岩遺蹟』河出書房新社，東京，1977。
140　中山平次郎「飯塚市立岩運動場発見の甕棺内遺物」(『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』９，福岡県，1934)。
141　児嶋隆人編『嘉穂地方史』先史編，福岡，1973。
142　浜田信也編『八木山バイパス関係埋蔵文化財調査報告』福岡県教育委員会，1983。
143　酒井仁夫編『日上遺跡』福岡県文化財調査報告書48，1971。
144　長谷川清之編『土師地区遺跡群(Ⅳ)』桂川町文化財調査報告書７，1985。
145　長谷川清之編『土師地区遺跡群(Ⅱ)』『同(Ⅳ)』桂川町文化財調査報告書２，４，1983，1985。
146　長谷川清之編『影塚東遺跡』―弥生時代編―，桂川町文化財調査報告書５，1985。
147　長谷川清之編「十三塚遺跡の調査」(『土師地区遺跡群』桂川町文化財調査報告書１，1982)。
148　長谷川清之編「影塚南遺跡の調査」(『影塚南遺跡(３地点)・影塚東遺跡(古墳時代編)』桂川町文化財調査報告書６，1986)。
149　福島日出海編『嘉穂地区遺跡群』Ⅳ，嘉穂町文化財調査報告書７，1987。
150　中間研志編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』24，福岡県教育委員会，1978。
151　石山　勲他編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』４，福岡県教育委員会，1974。
152　橋口達也編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』25，福岡県教育委員会，1978。
153　酒井仁夫他編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』７，福岡県教育委員会，1976。

154　川述昭人編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』6，福岡県教育委員会，1975。
155　浜田信也編『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』5，福岡県教育委員会，1977。
156　山野洋一編『修理田遺跡』筑紫野市文化財調査報告書5，1980。
157　奥村俊久編『通り浦遺跡・剣塚遺跡』筑紫野市文化財調査報告書10，1984。
158　奥村俊久編『山家地区遺跡』筑紫野市文化財調査報告書19，1987。
159　高山　純編『埋れていた朝倉文化』朝倉高校，福岡，1969。
160　川述昭人編『吹田古墳群』夜須町文化財調査報告書5，1981。
161　佐土原逸男他編『東小田遺跡群』県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告2，福岡県文化財調査報告書70，1985。
162　橋　昌信編『城山遺跡群発掘調査報告書』別府大学考古学研究室，1973。
163　佐藤正義編『夜須地区遺跡群』Ⅰ，夜須町文化財調査報告書6，1984。
164　佐藤正義編『夜須地区遺跡群』Ⅱ，夜須町文化財調査報告書7，1985。
165　馬田弘稔編『栗田遺跡』三輪町文化財調査報告書1，1974。
166　馬田弘稔編『栗田遺跡(B地区)』三輪町文化財調査報告書5，1986。
167　小田和利編『鬼の枕古墳』甘木市文化財調査報告書19，1987。
168　柳田康雄「弥生時代の甘木」『甘木市史』1984。
169　王城一枝編『日本考古学年報』38，日本考古学協会，東京，1987。
170　小田和利編『小隈出口遺跡・小隈松山遺跡』甘木市文化財調査報告書18，1987。
171　高山　明編『小田集落遺跡』甘木市文化財調査報告書2，1974。
172　中山平次郎「筑前国朝倉郡福田村平塚字栗山新発見の甕棺内遺物」(『考古学雑誌』15―4，1925)。
173　佐々木隆彦編『栗山遺跡』甘木市文化財調査報告12，1982。
174　赤川正秀「高樋・小坂遺跡の調査」(『辻遺跡』大刀洗町文化財調査報告書1，1987)。
175　馬田弘稔編『上川原遺跡』甘木市文化財調査報告書13，1982。
176　片岡宏二編『干潟遺跡』小郡市文化財調査報告書16，1983。
177　速水信也編『干潟下屋敷遺跡』小郡市文化財調査報告書37，1987。
178　速水信也編『井上北内原遺跡』小郡市文化財調査報告書20，1984。
179　浜田信也編『永岡遺跡』筑紫野市文化財調査報告書6，1981。
180　別府大学文学部編『福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡調査報告書』別府大学考古学研究報告書1，1970。
181　山野洋一編『矢倉遺跡』筑紫野市文化財調査報告書8，1982。
182　柳田康雄編『国道200号線バイパス関係埋蔵文化財調査概報』福岡県文化財調査報告書67，1984。
183　西谷　正編『津古内畑遺跡』小郡町教育委員会，1970。
184　柳田康雄編『津古内畑遺跡第3次』福岡県教育委員会，1972。
185　柳田康雄編『津古内畑遺跡第4次』小郡町教育委員会，1973。
186　片岡宏二編『三国の鼻遺跡』Ⅱ，小郡市文化財調査報告書31，1986。
187　速水信也編『横隈狐塚遺跡Ⅱ』小郡市文化財調査報告書27，1985。
188　浜田信也編『横隈山遺跡』小郡市教育委員会，1974。
189　橋口達也編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』31中巻，福岡県教育委員会，1979。
190　片岡宏二編『大板井遺跡』Ⅰ，小郡市文化財調査報告書11，1981。
191　工楽善通編『福岡県三井郡小郡遺跡』福岡県文化財調査報告書39，1968。
192　片岡宏二編『津古・東宮原遺跡』小郡市文化財調査報告書18，1983。
193　酒井仁夫編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』5，福岡県教育委員会，1974。
194　福岡県教委編『三沢蓬ヶ浦遺跡』福岡県文化財調査報告書66，1984。
195　山本信夫「位置と環境―栗原遺跡・古墳群―」(『向築地遺跡』小郡市文化財調査報告書

5，1979)。
196　山本信夫「位置と環境—西島遺跡—」(『向築地遺跡』小郡市文化財調査報告書5，1979)。
197　藤瀬禎博編『安永田遺跡』鳥栖市文化財調査報告書25，1985。
198　藤瀬禎博編『梅坂炭化米遺跡』鳥栖市文化財調査報告書10，1982。
199　藤瀬禎博編『大久保遺跡』鳥栖市文化財調査報告書3，1978。
200　石橋新次編『柚比遺跡群範囲確認調査第4年次概要報告書』鳥栖市文化財調査報告書12，1982。
201　木下　巧編『田代天満宮東方遺跡』佐賀県文化財調査報告書24，1973。
202　堤　圭子編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』8，1985。
203　友貞菜穂子編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』7，1984。
204　石橋新次編『柚比遺跡群範囲確認調査第3年次概要報告書』鳥栖市文化財調査報告書7，1980。
205　山田　正編『安永田遺跡本調査第1年次概要報告書』鳥栖市文化財調査報告書13，1982。
206　石橋新次編『安永田遺跡』鳥栖市文化財調査報告書16，1983。
207　山田　正編『安永田遺跡本調査第2年次概要報告書』鳥栖市文化財調査報告書15，1982。
208　藤瀬禎博編『村田・三本松遺跡』鳥栖市文化財調査報告書17，1983。
209　杠　一義編『香田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書2，佐賀県文化財調査報告書57，1981。
210　木下之治編『姫方遺跡』佐賀県文化財調査報告書30，1974。
211　田平徳栄他編『姫方原遺跡』—B，C地点発掘調査報告書—，中原町文化財調査報告書3，1979。
212　松尾禎作『佐賀県考古大観』—先史・原始時代編—，佐賀，1957。
213　東中川忠美編『宝満谷遺跡』北茂安町教育委員会，1980。
214　徳富則久他編『佐賀県農業基盤整備事業に係わる文化財調査報告書』5，佐賀県文化財調査報告書85，1987。
215　七田忠昭編『二塚山』佐賀県文化財調査報告書46，1978。
216　七田忠昭編『船石遺跡』上峰村文化財調査報告書，1983。
217　蒲原宏行編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』3，佐賀県教育委員会，1983。
218　蒲原京子編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』6，佐賀県教育委員会，1986。
219　堤　安信編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』4，佐賀県教育委員会，1981。
220　木下之治「考古学〔弥生時代〕—神埼郡東脊振村横田遺跡」(『新郷土』20—1，1967)。
221　金関丈夫他「三津永田遺跡」(『日本農耕文化の生成』，東京堂，東京，1961)。
222　森田孝志編『佐賀県農業基盤整備事業に係わる文化財調査報告書』1，佐賀県文化財調査報告書69，1983。
223　久保伸洋編『西前田B遺跡』東脊振村文化財調査報告書6，1982。
224　木下之治「埋蔵文化財の発掘発見の覚書」(『郷土研究』10，1960)。
225　金関丈夫「佐賀県切通遺跡」(『日本農耕文化の生成』東京堂，東京，1961)。
226　森田孝志編『佐賀県農業基盤整備事業に係わる文化財調査報告書』2，佐賀県文化財調査報告書74，1984。
227　八尋　実編『馬郡遺跡』神埼町文化財調査報告書7，1981。
228　七田忠昭編『下中杖遺跡』佐賀県文化財調査報告書54，1980。
229　堤　安信編『柴尾遺跡』Ⅱ，千代田町文化財調査報告書8，1988。
230　岩永政博編『利田柳遺跡Ⅲ区』神埼町文化財調査報告書，1980。
231　森田孝志編『筑後川下流用水事業に係わる文化財調査報告書』1，佐賀県文化財調査報

告書80，1985。
232　天本洋一編『尾崎利田遺跡』佐賀県文化財調査報告書55，1980。
233　河原忠司編『四本黒木遺跡発掘調査報告書』佐賀県教育委員会，1977。
234　八尋　実編『四本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書６，1980 。
235　東中川忠美編『久保泉丸山遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書５，佐賀県文化財調査報告書84，1987。
236　木下　巧編『金立開拓遺跡』佐賀市文化財調査報告書10，1974。
237　高瀬哲郎他編『大門西遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書１，佐賀県文化財調査報告書51，1980。
238　『全国遺跡地図』一佐賀県一，文化庁，東京，1988。
239　蒲原宏行他編『金立開拓遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書４，佐賀県文化財調査報告書77，1984。
240　福田義彦編『黒土原遺跡』佐賀市文化財調査報告書19，1987。
241　木下之治編『大門遺跡』佐賀市文化財調査報告書９，1973。
242　福田義彦編『東千布遺跡』佐賀市文化財調査報告書15，1985。
243　西田和己編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』５，佐賀県教育委員会，1983。
244　大和町教委編『惣座遺跡』大和町文化財調査報告書３，1986。
245　木島慎治編『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』10，佐賀県教育委員会，1988。
246　多々良友博編『久留間カミ塚Ｂ地点』佐賀県文化財調査報告書64，1982。
247　高島忠平「三日月町佐織の縄文土器」(『新郷土』31，1975)。
248　三日月町教委編『袴田遺跡』三日月町文化財調査報告書１，1980。
249　木下　巧編『戊遺跡』佐賀県文化財調査報告書36，1976 。
250　木下　巧「佐賀県下で注目された発掘調査の概報」(『日本考古学年報』37，誠文堂新光社，東京，1986)。
251　三日月町教委編『本告遺跡』三日月町文化財調査報告書２，1981。
252　『久米遺跡群』佐賀県文化財調査報告書42，1978。
253　木下　巧「原始」(『小城町史』，1974)。
254　西村隆司『東多久バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』佐賀県文化財調査報告書76，1984。
255　木下之治編『牟田辺遺跡』多久市教育委員会，1975。
256　天本洋一『牟田辺遺跡』第Ⅱ次，多久市文化財調査報告書２，1977。
257　西村隆司『牟田辺遺跡』多久市文化財調査報告書３，1978。
258　西村隆司編『撰分遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書７，佐賀県文化財調査報告書87，1987。
259　武雄市教委『史跡おつぼ山神籠石保存管理計画策定報告書』武雄市文化財調査報告書５，1978。
260　大園　弘編『枇島山遺跡調査報告書』佐賀県立博物館調査研究書３，1977。
261　原田保則編『小野原遺跡』武雄市文化財調査報告書17，1987。
262　原田保則編『茂手遺跡』武雄市文化財調査報告書15，1986。
263　原田保則編『郷ノ木遺跡Ｂ地点』武雄市文化財調査報告書14，1984。
264　稲富裕和編『富の原』大村市文化財調査報告書12，1987。
265　田川　肇編『長崎県埋蔵文化財調査集報』Ⅷ，長崎県文化財調査報告書75，1985。
266　正林　護「諫早市出土の銅剣」(『九州考古学』41～44，1971)。
267　田川　肇「小栗Ｂ遺跡」(『長崎県埋蔵文化財調査集報』Ⅷ，長崎県文化財調査報告書75，1985)。

268　秀島康秀編『林ノ辻遺跡』諫早市文化財調査報告書４，1983。
269　高野晋司編『西の角遺跡』長崎県文化財調査報告書73，1985。
270　田川　肇編『長崎県埋蔵文化財調査集報』Ⅱ，長崎県文化財調査報告書45，1979。
271　古田正隆編『大野原遺跡発掘調査概報』有明町埋蔵文化財調査報告書３，1985。
272　古田正隆『大野原遺跡の一部地目変更に伴う研究調査報告』有明町埋蔵文化財調査報告５，1986。
273　副島和明「一部遺跡」(『長崎県埋蔵文化財調査集報』Ⅹ，長崎県文化財調査報告書86，1987)。
274　小田富士雄「島原半島景華園の遺物」(『考古学雑誌』45―３，1959)。
275　森貞次郎「島原半島，原山遺跡」(『九州考古学』10，1960)。
276　森貞次郎「原山遺跡」(『九州考古学』14，1962)。
277　高野晋司『国指定史跡原山支石墓群環境整備事業報告書』北有馬町教育委員会，1981。
278　宮崎貴夫編『今福遺跡』Ⅱ，長崎県文化財調査報告書77，1985。
279　宮崎貴夫他編『今福遺跡』Ⅲ，長崎県文化財調査報告書84，1986。
280　北條暉幸「宇土市松山町畑中遺跡出土の甕棺」(『宇土市史研究』２，1981)。
281　松本健郎他編『上の原遺跡』Ⅰ，熊本県文化財調査報告58，1983。
282　富樫卯三郎「宇土市発見の石蓋甕棺」(『九州考古学』20・21，1964)。
283　緒方　勉編『沈目立山遺跡』熊本県文化財調査報告26，1977。
284　緒方　勉他編『久保遺跡』熊本県文化財調査報告18，1975。
285　熊本市文化財調査会編『熊本市東部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会，1971。
286　緒方　勉編『神水遺跡』Ⅱ，熊本県文化財調査報告82，1986。
287　富田紘一他『渡鹿遺跡群発掘調査―概報―』熊本市教育委員会，1974。
288　大城康雄他編『昭和53年度下南部遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会，1979。
289　西健一郎「熊本県における弥生中期甕棺編年の予察」(『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』1982。
290　熊本市文化財調査会編『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会，1969)。
291　乙益重隆「中九州地方」(『弥生式土器集成』本編１，1965)。
292　『牟田原遺跡調査報告』同調査団，1977。
293　平岡勝昭他編『梅の木遺跡』熊本県文化財調査報告62，1983。
294　瀬丸敬二他編『西矢護免遺跡調査概報』同調査団，1980。
295　坂本経堯『藤尾支石墓群』旭志村教育委員会，1959。
296　佐藤伸二他編『矢護川日向遺跡調査報告』同調査団，1980。
297　『泗水町史』1965。
298　『鹿本町史』1976。
299　立山広吉「熊本県山鹿市塚ノ本遺跡調査報告」(『石人』８―２，1967)。
300　高倉洋彰「弥生時代副葬遺物の性格」(『九州歴史資料館研究論集』２，1976)。
301　橋口達也「磨製石剣嵌入人骨について」(『スダレ遺跡』1976)。
302　隈　昭志「熊本県小原竜宮遺跡調査報告」(『九州考古学』28，1966)。
303　『塔の本遺跡発掘調査』1972。
304　橋口達也「甕棺の編年的研究」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』31中巻，福岡県教育委員会，1979)。
305　杉村彰一他編『大園山・杉谷遺跡』荒尾市文化財調査報告３，1978。
306　平島廣幸編『荒尾市の文化財』Ⅰ，荒尾市文化財調査報告６，1982。
307　石田広美『羽山台遺跡』大牟田市教育委員会，1975。
308　平島勇夫『羽山台遺跡』大牟田市文化財調査報告書16，1982。
309　黒田康夫「倉永弥生文化遺跡の研究」(『昭和59年度埋蔵文化財調査概要』大牟田市文化財調査報告書24，1984)。

310　川述昭人「堤遺跡出土の甕棺墓」(『女山・山内古墳群』瀬高町文化財調査報告書 2，1982)。
311　田中康信他編『藤の尾垣添遺跡』瀬高町文化財調査報告書 4，1988。
312　川述昭人編『権現塚北遺跡』瀬高町文化財調査報告書 3，1985。
313　小田富士雄編『亀の甲遺跡』八女市教育委員会，1964。
314　川述昭人編『曲松遺跡』立花町文化財調査報告書 2，1985。
315　副島邦弘編『室岡山ノ上遺跡』八女市文化財調査報告書 8，1982。
316　川述昭人編『前津中の玉遺跡』筑後市文化財調査報告書 4，1987。
317　富永直樹他編『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書』2，久留米市文化財調査報告書36，1983。
318　鏡山　猛「甕棺累考(一)その群団と共有体」(『史淵』53，1952)。
319　水野清一・島田貞彦「北九州における甕棺調査」(『人類学雑誌』43—10，1928)。
320　島田寅次郎「石器と土器，土墳と副葬品」(『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』13，1939)。
321　久留米市教育委員会『石丸遺跡現地説明会パンフレット』1977。
322　大石　昇『西屋敷遺跡』久留米市文化財調査報告書35，1983。
323　大石　昇『西屋敷遺跡』Ⅱ，久留米市文化財調査報告書40，1984。
324　第 4 回くるめの考古資料展パンフレット，久留米市教育委員会，1978。
325　富永直樹編『筑後国府跡』久留米市文化財調査報告書51，1987。
326　立石雅文他編『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書』3，久留米市文化財調査報告書39，1984。
327　石山　勲編『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』27，福岡県教育委員会，1979。
328　富永直樹「安国寺の調査」(『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査概報』久留米市文化財調査報告書32，1982)。
329　高橋徹他編『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報』大分県教育委員会・日本住宅公団，1985。
330　高橋徹他編『九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報』大分県教育委員会・日本道路公団，1986。
331　村上久和他編『吹上遺跡』Ⅰ，日田市教育委員会，1980。
332　後藤宗俊他編『吹上遺跡』Ⅱ，日田市教育委員会，1981。
333　土居和幸編『日田地区遺跡群発掘調査概報』Ⅱ，日田市教育委員会，1987。
334　弥栄久志「白寿遺跡」(『日本考古学年報』31，東京，1980)。
335　河口貞徳「下小路遺跡」(『鹿児島考古』11，1976)。
336　戸崎勝洋他編『阿多貝塚』金峰町埋蔵文化財調査報告書 1，1978。

（本館　考古研究部）

Jar Burials in Kyushu

FUJIO Shin'ichiro

"Kamekan" or jar burial is a super large jar type earthenware developed particularly for burial in the northern part of Kyushu in the Yayoi period (4C. B. C.-3C. A. D.). Burial with ceramic coffins existed already in the Johmon period. Such coffins have been discovered all over Japan. But these coffins are in fact earthenwares used in daily life and sometimes diverted as coffins on the occasion of funeral service. While the jar burials were intended only for burial ceremony, and are widely different from the earthenware used in daily life, both quantitatively and in form. These burials are distributed concentratedly in a limited time in the Yayoi period, and this in the northern part of Kyushu.

The jar burials first attracted archaeologist's attention when they found that Chinese and Korean imported bronze implements had been used as burial rituals whose real dates had been made clear to a certain extent.

Furthermore, the correspondence between chronological sequence of earthenware in the Yayoi period and absolute dates can be identified.

As a consepuence of the foregoing, the jar burials were considered, from olden times as useful subjects of study for restoring the society in the northern Kyushu to its original state.

Since the jar burials are the earthenware which developed specifically in size and form, it has been infered the existence of specialized craftsmen who made them. At present they are roughly divided into 7 patterns by such surface finishing as brush-mark finishing and paddle marks or form and by difference in color tone deriving from existence or non-existence of fillers, and further each pattern has been associated with each small district having, as their unit, an open field in the northern part of Kyushu. "Local types" have thus been established. Such local patterns once defined, with the existence of specialized craftsmen in their background, useful data can be furnished for clarifying the characters of the buried persons and the relationship between a region, producer

of the jar burials and another where the persons were buried and whereinto the jars had been transported, if we investigate how they were buried in the cemetery with the jar burials transported from the producing region.

This paper is intended to prepare a distribution map of jar burials, to be taken as a basic work to establish local types of jar burials which can be regarded as useful element to know what was the society in Kyushu in Yayoi period.

We roughly divided into five the period during which the jar burials existed, by such factors as: manufacturing techniques, line, diffusion into regions other than northern Kyushu and period of decline, type of burial rituals and form of possession. We then put in order the distribution range by period and evolutive quantitative change of the jar burials.

As a result of these investigations and studies, we could become clear the following fact. That the burial with jar burials was not performed long in such areas as Fukuoka, Kasuga and Itoshima where are distributed the Suku-Okamoto and Mikumo vestiges in Fukuoka Prefecture, where gorgeous burial rifuals have been found in great quantity, but that the burial with jar burials were performed in a great number and for a long time in the regions along the shore of the Ariake Bay, such as Saga and Kanzaki.